ISSN 2186－2125

文化学園長野専門学校

研 究 紀 要

第 7 号

2015

研究紀要　第７号

目次

＜原著論文＞

幼児の音楽教育に関する実態調査 ---------- 倉科　深陽　3
－アンケートによる幼稚園・保育園の現場からの声－

幼児期の自称詞使用に関する実態調査 ---------- 守　秀子　15

模擬保育における視覚教材の有効性の検証 ---------- 宮原　千秋　29
－内発的動機づけの視点から－

＜報告論文＞

平成 26 年度 創作ミュージカル「3 つのブレスレット」 ---------- 石坂　由美子　39
倉科　深陽

平成 27 年度 創作ミュージカル「魔法書セフィロト」 ---------- 石坂　由美子　73

幼児の音楽教育に関する実態調査

－アンケートによる幼稚園・保育園の現場からの声－

倉科　深陽

A Survey of Music Education for Preschool Children:
Voice from Questionnaires Conducted in Kindergartens and Nursery Schools

KURASHINA,　Miharu

キーワード：歌唱指導、新曲導入方法、視覚教材

１．はじめに

幼稚園、保育園では音楽活動は欠かせないものであり、一日の生活の中で音楽的な要素を持った活動が多く行われている。その中で歌唱の活動は大半を占め、ほとんどの園では毎日非常に多くの曲が歌われている。子どもたちが沢山の歌を覚え歌っている姿は活き活きとしており、歌唱時の表情や表現力も豊かで、心から楽しんでいる様子が見られる。

今回の調査は、幼稚園、保育園で行われている音楽教育（歌唱指導）の実態を把握し、これからの学生指導の在り方について研究を深めていきたいと考え、アンケート調査を本校卒業生に実施し、広く現場の声を集めることにした。

２．方法

調査対象：本校卒業生（2001 年～2015 年卒業者で、卒業と同時に幼稚園または保育園に勤務した人 436 名）

調査方法：卒業時の自宅住所へ郵送し、アンケート記入後返送してもらった。

実施期間：2015 年 6 月～7 月

調査内容：主に幼稚園・保育園における歌唱指導の実態調査
調査用紙は次の通りである。

アンケート用紙

幼児の音楽教育についてアンケート

文化学園長野専門学校　倉科 深陽

質問１　１ヶ月におおよそ何曲くらい歌いますか。当てはまる箇所に〇をして下さい。

０～３曲、４～６曲、７～９曲、１０～１４曲、１５曲以上

質問２　新曲を子どもにおろすとき、よく使う方法に〇をして下さい。(複数回答可)

ア　歌詞の内容を簡単に子どもに話してから導入する。

イ　絵本やペープサート、実物を見せたり視覚教材を使用して導入する。

ウ　自由遊び、食後、午睡前、その他の時間等を利用して、あらかじめ何回も歌ってあげたり、伴奏を聞かせたりしてなじませておく。

エ　歌詞の内容または曲の特徴的な箇所を取り出して活動したり、遊んだりしてから自然に導入する。

オ　保育者が一通り歌ってから、次に区切って子どもたちと交互に歌っていく。

カ　CD などを使用し、何回も聞かせて覚えていく。

キ　黒板等に文字を書いて歌詞を見ながら歌っていく。

ク　特に導入はせず、子どもたちと何回も歌っていくうちに覚えさせてしまう。

ケ　その他　(ア～クの方法以外にございましたらお書きください)

質問３　歌を歌うときの使用楽器で、当てはまる箇所に〇をして下さい。(複数回答可)

ピアノ　・　キーボード　・　オルガン　・　CD　・　その他（　　）

質問４　現在または、以前受け持ったことがあるクラス(年齢)をお答えください。当てはまる箇所に〇をして下さい。(複数回答可)

未満児０～１歳　　２歳　　年少　　年中　　年長　　縦割り　その他(　　)

質問５　学生時代に力をつけてきて欲しいことなど、ご要望や学生へのアドバイスがありましたら別紙にご記入下さい。また、ご自身が学生時代にやっておいて良かったこと(職場で役立った)などありましたらお書きください。

３．結果と考察

調査対象者 436 名のうち、107 名から回答を得た。

アンケートの回答結果は以下の通りである。質問１～５を項目ごとにまとめ、考察を加える。下記の(1)～(5)は、それぞれ質問 1～5 に対応する。

（1）　１ヶ月に歌うおおよその曲数

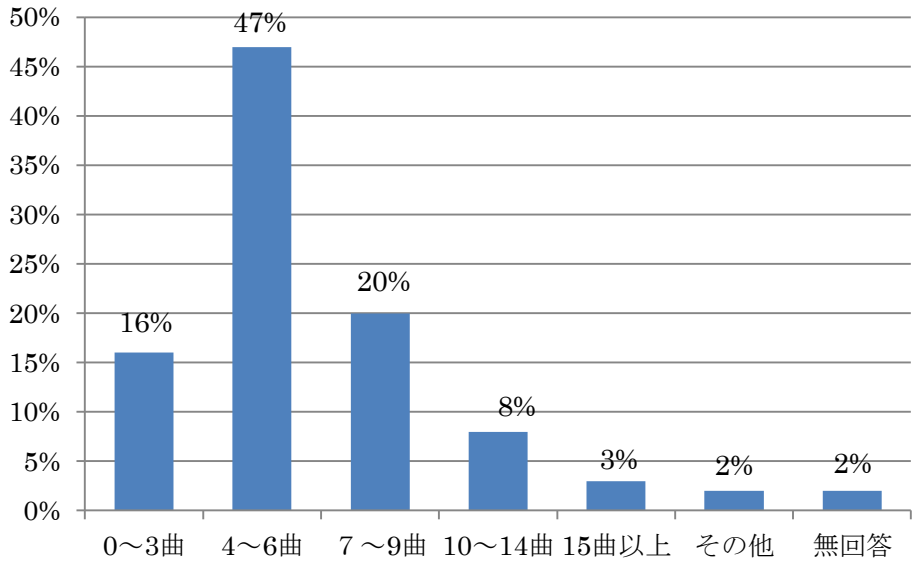


図１　１ヶ月に歌う曲数

図１からわかるように、1 ヶ月におおよそ 4～6 曲の歌を歌っているという回答が 47%と突出して多かった。選曲や曲数に関しては、クラス担任が日々の保育に合わせて進めていると考えられるが、季節に合わせた曲や、子どもたちの好きな曲を取り入れたり、園全体での計画、クラス担任の計画などに基づいた曲を組み入れたりするため、時期により、ばらつきが大きいと思われる。また、「乳児と幼児とでは歌う曲数が異なる」という回答があり（その他に含む)、勤続年数が長い保育者の何人かは、この意見と同様の事を感じていた可能性もある。4～6 曲という数字が、おおよその平均で回答してくれたものなのか、現在受け持っている年齢に合わせて回答してくれたものなのか、あるいはどの年齢にも当てはまるものなのかは不明である。しかしながら、複数のクラス担任を経験した保育者の多くは、このような年齢や時期によるばらつきを全て平均して、おおよそ 4～6 曲と回答してくれたものと考えている。

（２）　新しい歌の指導方法

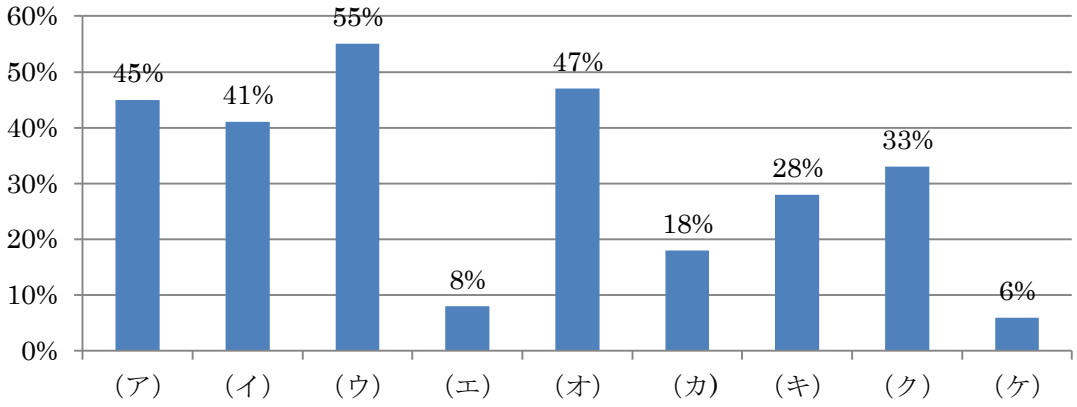


図２　新曲指導の方法

（ア）歌詞の内容を簡単に子どもに話してから導入する。
（イ）絵本やペープサート、実物を見せたり視覚教材を使用して導入する。
（ウ）自由遊び、食後、午睡前、その他の時間等を利用して、あらかじめ何回も歌ってあげたり、伴奏を聞かせたりしてなじませておく。
（エ）歌詞の内容または曲の特徴的な箇所を取り出して活動したり、遊んだりしてから自然に導入する。
（オ）保育者が一通り歌ってから、次に区切って子どもたちと交互に歌っていく。
（カ）CD などを使用し、何回も聞かせて覚えていく。
（キ）黒板等に文字を書いて歌詞を見ながら歌っていく。
（ク）特に導入はせず、子どもたちと何回も歌っていくうちに覚えさせてしまう。
（ケ）その他
・歌詞ばさみ
・歌詞に合わせて振付をする
・手遊び感覚で
・少ししか分からなくても歌い続ける
・歌ったことがある歌なので、歌唱指導をする必要がない
・子どもが口ずさんでいる曲を弾き、興味を惹き出しつつおろす
・他のクラスが歌っていたら聞かせてもらう

以下に、新曲をおろす方法として多く挙げられた項目から順に、解釈を加える。

（ウ）自由遊び、食後、午睡前、その他の時間等を利用して、あらかじめ何回も歌ってあげたり、伴奏を聞かせたりしてなじませておく。(55%)

（ウ)に関しては、回答者の半数以上の保育者が行っており、歌を歌う時間のみではなく、

一日の園生活を通して歌や音楽になじませている様子がうかがえる。

（オ）保育者が一通り歌ってから、次に区切って子どもたちと交互に歌っていく。(47%)

保育者が模範となり子どもたちに歌の醍醐味を伝えていると感じられる。模範となる保育者の生の歌声は、子どもたちにとって影響力は大きく、保育者が表情豊かに歌うことでその曲の良さがより伝わり易いのではないかと思われる。

（ア）歌詞の内容を簡単に子どもに話してから導入する。(45%)

（イ）絵本やペープサート、実物を見せたり視覚教材を使用して導入する。(41%)

これらも多くの保育者が行っており、筆者も大切な導入法のひとつであると考える。

保育者は、子どもたちに歌を単に歌わせるだけでなく、歌の中に出てくる単語や言葉の意味をわかり易く伝えることが大切である。例えば、童謡「どんぐりころころ」に出てくるどんぐりは、季節になれば山や公園で拾うことが可能であり、園内で実物を見せながら歌うことが出来るが、童謡「ぞうさん」に出てくる象は、園内で実物を見せながら歌うことは不可能である。そこで、象が描かれている絵本や、象を描いたペープサートを見せ、保育者が歌詞に沿った説明を入れて子どもたちと歌詞の内容を対話したり、歌って聞かせれば、子どもたちは、その物がどんな物でどんな内容が歌われているのか非常にわかり易くなると筆者は考える。視覚教材は保育者のアイディア次第で子どもたちの世界観を広げることができ、楽しませることができる。回答が 41%と、筆者が考えていたよりこの方法で導入している保育者は少なかったが、視覚教材を有効に使用し、子どもたちにわかり易く親しみやすい導入の方法として使われていることがわかった。

（ク）特に導入はせず、子どもたちと何回も歌っていくうちに覚えさせてしまう。(33%)

複数回答可のため（ク）のみの回答をしている人は少数で、実際は何らかの導入を行ったうえで子どもたちと何回も歌い、歌っていくうちに自然と覚えていくものと思われる。

また、子どものテレビ番組等では多くの歌が歌われており、各家庭でも視聴の機会が多いと思われる。その際に耳なじんでおり、園で歌うときには多少なりとも歌えるようになっているため、特に導入する機会がないのではないかと推測される。

（キ）黒板等に文字を書いて歌詞を見ながら歌っていく。(28%)

（キ）のみの回答はなく、何らかの導入を行ったうえで、文字が読めるようになってきた年長児クラス等で行われているものと思われる。

（カ）CD などを使用し、何回も聞かせて覚えていく。(18%)

（カ）のみの回答はなかった。普段はピアノでの伴奏が多いが、ピアノ伴奏のみならず CD 等も活用して、ピアノ伴奏では成しえない音色での伴奏で雰囲気を変えたり、身体

活動を取り入れ一緒に動きながら歌うなど、工夫しながら曲をおろしていると思われる。

（３）　歌を歌うときの使用楽器

選択肢は、ピアノ・キーボード・オルガン・CD・その他としていたが、選択肢中その他の回答にて、電子ピアノ・エレクトーン・打楽器・アカペラとされたため、以下分類は、ピアノ、ピアノ以外の鍵盤楽器（キーボード・オルガン・電子ピアノ・エレクトーン）、打楽器、アカペラと表記する。

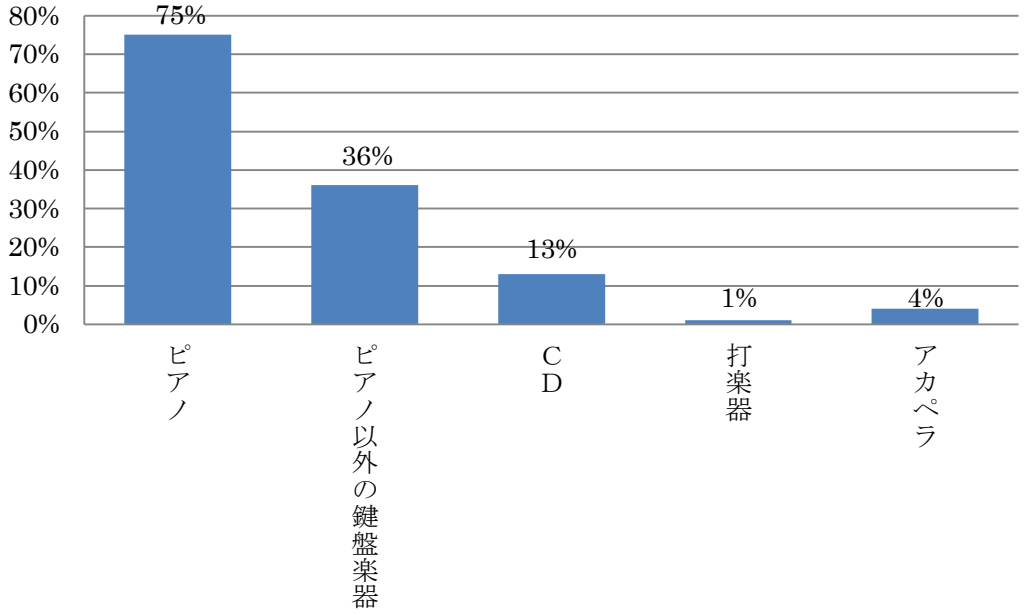


図３　歌を歌うときの使用楽器

図３からわかる通り、ピアノなどの鍵盤楽器を使用している園が非常に多い。このことより、保育者にとっては鍵盤楽器を弾けることは必須であると言える。なお、未満児クラスを担当している保育者の回答に、ピアノ以外に、打楽器やアカペラでの指導も行っていると記載されていた。

他にはキーボードを使用しているとの回答があった。キーボードは大きさも様々ではあるが、収納や移動も容易で、ピアノのように固定された位置での使用のみにならず、場所を変えて歌うことも出来る。また、多くのキーボードには音色変更の機能が付いているため、曲の雰囲気に合わせて音色を変えながら演奏できる利点もある。このことからも使用園（クラス）が多いのではないかと推測される。

（4）　受け持ったことがあるクラス(年齢)

未満児０～１歳　：55 人
２歳　：55 人
年少　：60 人
年中　：56 人
年長　：47 人
縦割り　：　7 人
その他　：障害児：１人　　一時預かり：１人　　満３歳：２人

一般的に勤務年数が長いほど、多様な年齢の受け持ちを経験していることが多いが、そのときの諸事情や、保育者の持ち味等で受け持ちについては変わってくると考えられるため、この結果からは特に読み取れるものはなかった。

（5）　養成校への要望や後輩へのアドバイス

＜音楽に関して＞

・学生の間にいろいろな曲に触れ、弾き歌いのレパートリーを沢山持っていた方が良いです。練習が嫌だなと思ってしまうときがあるかもしれませんが、諦めずにピアノや歌の練習をしておいた方が少しでも自分の自信になることを伝えたいです。

・現場に出るとピアノは本当に練習している時間がないので、学生の間に身に付けておいた方が良いです。ピアノさえ上手ければ・・・と何度も後悔しました。頑張りましょう！

・とにかくピアノ！現場に行ったら、1 年目など関係なくピアノを弾かなくてはならないので、曲の数を増やしたり、鍵盤を見ないで弾けるように練習しておくべきだったと後悔しています。学生の間が一番チャンス！

・リトミックも、もう少し勉強しておくべきだった。

・童謡だけではなく、いろいろな曲を弾けるようにしておいた方が、発表会の際、すぐに対応できると思います。

・ピアノに集中しすぎていて、子どもたちではなく楽譜とにらめっこをしている人が多いように思います。子どもたちがどのような表現をするのか、また保育者も同じ気持ちで歌ったり、コミュニケーションも取れる大切な時間だと思います。慣れもあるかもしれませんが、学生のうちに譜面を見ないで弾ける余裕があると良いかもしれません。

・学生の時に出された課題（夏や秋の曲など）をやっておいて、現場ですぐに弾けてとても助かりました。皆さんもしっかり課題に取り組むと良いと思います。

・ピアノはとても大事です。一日に何回もピアノを弾くことがあり、音楽会や生活発表会などいろいろな行事でも弾きます。私は親としても感じたことですが、自分の子どもの担任はよく間違えてしまい、子どもたちも先生のピアノについていけなくなって、ピアノと声が合わなくなってしまうこともありました。聞いているこちらもドキドキで、不安になってしまう経験もしました。
・ピアノは弾けない方でしたが、今は徐々に子どもの姿を見て弾けるようになりました。沢山練習しておくことの大切さを改めて感じました。自分が思っていた以上に、子どもたちの覚えが早いので、沢山のレパートリーがあった方が良いと思います。
・鍵盤や楽譜から目線を離して大きな声で弾き歌いできるよう練習を重ねておいた方が良い。また、歌詞挟みも出来るようにした方が良い。
・子どもを見ながらピアノを弾くことが最初は出来ずに大変でした。年数を重ね、出来るようになりましたが、1 年目が一番苦労するので、できていたら良かったと感じます。
・ペープサート等の視覚教材等を沢山作っておくと便利です。
・学生時代に手作りした楽譜帳は職場でも大いに活用していて、子どもたちにも注目を受けています。授業で配られた楽譜や自分で見つけた楽譜、実習園からいただいた楽譜など、たくさんファイリングして整理しておいたので本当に良かったです。
・自分で作った楽譜帳は今でも大切に使い、増やしている。働けば働くほど曲も増えます。自分の物として楽譜を大切にして欲しいです。
・楽譜帳を手作りしておいて役立ちました。でも、もっと学生の間に時間をかけて丁寧に作っておけば良かったなと感じます。
・学校で出された課題の手作り楽器は、自分で考えながら作り、友だちの作品も見ることが出来て、とても参考になります！　実際園でも作りました。皆さんも研究をしっかりしておくと良いと思います。
・ピアノで演奏するのが難しくても、CD や導入の仕方を工夫すれば子どもへの伝え方はたくさんあるので、ピアノの技術だけでなくそういった状況に臨機応変に対応できるよう、いろんな方面からの見方ができると良いと思います。
・楽譜も様々ですが、簡単な伴奏譜で歌うのと、少し難度の高い伴奏譜で歌うのとでは、子どもたちの歌の表現力が全く違います。特に年長児になると難度の高い伴奏譜で歌った時は、鳥肌が立ちました。学生のうちにピアノはしっかりと身に付けておいてほしいと思います。
・学生の間にできるだけ沢山、同じ曲でも違う楽譜でも弾けるようにしておけば良かったと就職してから後悔しました。
・実習生を受け持たせていただいた際、ピアノが苦手な実習生でしたが、事前に渡しておいた最低限実習までに練習してきて欲しい曲を、“苦手”との理由から実習中一度も弾かずに終わってしまったことがありました。私自身もピアノが苦手だったので、

学生さんの気持ちも分かったのですが、苦手でも努力する姿勢を見せて欲しいと感じました。

＜音楽以外＞

・基本的なこと（挨拶、気働き、礼儀など）は様々な場面で言われたり、必要とされることなので、学生の間に身に付けておいた方が良いと思う。私は在学中に学び、身に付けられた部分が多かったので、現場に出てから役立った。

・率先して動く姿が欲しいです。保育の現場では気働きが出来ることが重要です。保育のプロとして必要なことだと感じています。

・社会に出ると目上の方と接することも多くなります。現場では保護者との対応も大事になってきますので、言葉遣い、マナー、礼儀は学生時代から意識して身に付けておいた方が良いと思います。

・文章を書く力や、誤字には本当に気を付けるべきだと思います。日誌を書いたりする中でも、文章一つ（言葉一つ）で保護者への伝わり方も変わってしまいます。誤解を与えない文章の書き方も身に付けておくと良いと思います。

・ちょっとした合間にできるゲーム、遊び、手遊びなどのレパートリーを持っていると役立てられる。

・手遊びでもピアノでも制作でも・・・何か一つ自分の得意な事があると自信を持って仕事ができると思います。

・洗濯の仕方や干し方なども知っていて欲しいと感じます。日頃の生活面から得られることですので。

・1年目の時は分からなくて当たり前ですが、何事も一度やってみて失敗するのも経験だと思うので、どんどんチャレンジして欲しいです。後は、失敗したりミスをしたりしたときに、わからない時は素直に“すみません”“ありがとうございました”が言えるようになってほしいなと感じます。

・発達障害に関する知識を学校の授業でしっかり学んでくると良いと思います。

・保護者への対応の仕方や言葉掛けの方法、接し方など少し学んだ方が良かったと自身で感じました。

・卒業共同研究で行った創作ミュージカルを経験したことで、保育者に必要な力がつきました（度胸、人と協力すること、作り上げる力、見通しを持って進める事、自信がつくこと）。また、作曲や、振付、演出、大道具、小道具全てにおいて、お遊戯会や発表会でも役立てることができ、本当に良かったです。

＜その他＞

・やって無駄だったことはひとつもありません。自分がやった分、力になり子ども達が喜んで歌ってくれました。

・学校では学べない事もたくさんあります。現場では日頃の生活の中からヒントを得る事もたくさんあります。学校の勉強はもちろん、たまには息抜きをして「今」を大切にして下さい。現場で待っています！！

・人とのコミュニケーション力は大事だと思います。そして、笑顔、素直さ、明るさは何よりも大事なことだと思います。子ども、保護者、職員から信頼できる保育者を目指して欲しいです。

・学生時代にピアノやミュージカル、実習を通して目標に向かって前向きに取り組むことの大切さを学んだり、先生方から保育に関する知識、気働きの大切さを教えて頂いたことで、職場で活かされることが沢山あります。学生の皆さん頑張って下さい。

４．まとめと課題

今回のアンケート調査から日頃実習等で関わることが多い園以外からの回答も寄せられたことで、広範囲の園の様子を伺うことができた。

まず 1 つ目に、1 ヵ月に歌う歌の曲数で多い園では 15 曲以上との回答もあり、平均でも 6 曲程度は歌っていることがわかった。

今回の調査以外にも、本校の学生に保育園や幼稚園の現場での実習後、音楽関係の調査を毎回行っているため、園では朝、昼、お帰り時に数曲ずつ歌い、一日に 7～8 曲の歌を歌っていることは以前から把握していた。多くの曲を知っていることや、弾けるレパートリーを多数持っていることが非常に大切であり、その必要性を以前から強く感じていたが、今回の調査からも同じことがわかった。

本校の学生には目標として､2 年後の卒業までに 100 曲の弾き歌いレパートリーが持てるよう、課題カードを入学後すぐに提示し、授業時間内は勿論だが、力をつけるために、朝や昼休み放課後等の空き時間も利用して指導や確認を行っている。

100 曲という大きな目標だけでは勿論この課題を消化することは難しいため､2 年間の間に細かな目標設定と課題を設け、一つ一つの課題に向かえるよう工夫をしているが、近年は決められた最低ラインの課題を消化するのに苦労する学生も増えてきた。入学前にピアノを習った経験が少ない学生が増えていることと、ピアノ技術力は積み重ねなくしては育つものではないが、目標を持って課題に向かえない学生が増えてきていることが要因かと感じられる。

ピアノ技術力には個人差があり、本校では個別指導と全体指導の両方で学生各々のピアノ技術力を伸ばしているが、現場で困らないだけの力をつけるためには、各々の技量と性格を把握し、前向きに取り組めるような指導の工夫が必要である。またそれが大きな課題でもある。

2 つ目に新曲の歌唱指導について、あらかじめ何回も歌って聞かせる方法や、保育者と子どもたちが交互に歌っていく方法などは、一つの手段として多くの園で行われている

が、視覚教材（ペープサート、パネルシアター、紙芝居等）を使用しての新曲指導は、41%と多い方ではあるものの、筆者が期待していたより少ないことがわかった。

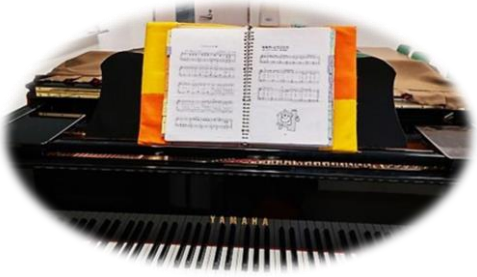
視覚教材を有効に使用することでその曲への関心も高まり、曲のイメージもし易く、歌詞の内容もわかり易いので活用することが望ましいと考えるが、現場では、歌唱(音楽)のみに費やす教材研究の時間は他の研究や準備等もあり限られている。歌唱指導のための教材は既製品がほとんど無いため、手作りの教材を準備することになり、その準備に時間を向けることはなかなか難しいのであろう。

ただ、質問 5 の記述式部分に「ペープサート等の視覚教材等を沢山作っておくと便利です」「もっと学生の間に歌唱指導のペープサートや紙芝居、パネルシアターなど作っておけばよかった」などと言う意見も聞かれ、活用したいという前向きな気持や、現在使用しているがさらに充実させたいという気持ちがうかがえた。このことから学生にも手間をかけられる今を大事に、準備させていきたいと改めて思う。また、現場ではその曲をイメージさせる視覚教材を一部分のみでも良いので活用していくと歌の世界が広がり、日頃の歌唱活動にプラスされるものがあると思われるため、今以上に広がっていくことを願う。

3 つ目に、楽譜帳の活用についてであるが、本校では学生各々がオリジナルの楽譜帳を作成しており、本校の伝統にもなっている。楽譜帳を作るにあたって筆者は、授業時に配布した楽譜や実習等で園から配布された楽譜を大事にするため、整理するよう指導している。卒業してからも保育の現場で活用出来るよう、季節ごとや、五十音順などまとめ方もそれぞれ工夫させている。本調査の結果、多くの卒業生が現場に出てからも大いに活用していることがわかり、非常に嬉しく思う。

筆者と学生が 2 年間かけて研究しながら作成したこの楽譜帳は､学校で学んだことと、幼児教育現場を結ぶ物であり、本校卒業生以外の現場保育者からも高い評価を得ている。

卒業生から「こんな楽譜が欲しい」「学生の間にこの曲は知っていて欲しい」などと現場からの声（意見）をもらうと、筆者はすぐに授業内で取り入れるために準備をして学生におろすよう心がけている。これからも学生各々のオリジナルの楽譜帳が現場で活用できるものになるよう、研究を重ね工夫していきたい。



学生のオリジナル楽譜帳

５．おわりに

今回のアンケートでいくつもの課題も見えてきた。音楽技術力や表現力、また、子どもたちの表現力を引きだすための方法や能力等、学生の間に身につけておきたい素養は多くある。音楽の技術の向上は、決して短期間に成しえるものではないので、学生の意識付けから始め、向上心を持って取り組み習得させるべく授業を展開していくが必要がある。

さらに、質問 5 にも示されているように、音楽以外にも保育者養成校として行うべき数々の指導も見えている。保育者を志す学生が、高い意識を持って切磋できるよう援助していきたいと考える。

＜付記＞

本研究は、公益社団法人長野県私学教育協会の平成 27 年度私立学校研究助成金を受けて実施されたものです。

最後に本研究の調査におきましては、多くの卒業生の皆様にご協力いただきましてありがとうございました。貴重なお時間を割いてアンケートにご回答くださった皆様、そして本研究に関してお骨折りいただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。

幼児期の自称詞使用に関する実態調査

守　秀子

A Survey of the Usage of First-person Pronouns in Preschool Children

MORI, Hideko

キーワード：自称詞、男女差、幼稚園、保育園

問題

社会言語学者の鈴木によれば、自称詞とは「発話の中で話者が自分自身を指示したり、自分自身に言及するために用いる語のこと」と定義される（鈴木；1982）。日本語圏では、自称詞として「わたし」「ぼく」「おれ」「うち」「わし」など多くの人称代名詞が使われており、これらは性別によって使われ方が異なったり、あるいは相手との関係性によって使い分けられたりしている事が確かめられている（鈴木；1973、西川；2003、小森；2008、有松・皆川；2011、白石；2012、緒方；2015）。

自称詞の研究を、発達および男女差の観点から精力的に進めてきた西川は、「こどもは言葉を獲得して間もない 2 歳を過ぎた頃から、自分が周囲のおとなから呼ばれている愛称を名乗って『〇〇ちゃんの』『〇〇ちゃんが』とものの所有を宣言したり、行動の主体となることを訴えたりして他者との区別を明確にし自己意識を高めて自我を強めてゆく」とし、自称詞は自我と関連して獲得され始めると述べている。そして「3 歳を過ぎると女児には大きな変化はみられないが、男児の場合には『ぼく』『オレ』などさまざまな自称詞の使い分けがみられるようになる」事を示した（西川；2003）。つまり、自我が芽生え始めた頃の自称詞は、対称詞として使われている 3 人称的なものであるが、発達に伴い代名詞が出現する。そして、その様相には男女差が見られる事を報告している。

このように、子どもたちは、始めは愛称やなまえなど、周りの大人に呼ばれているものであるところの対称詞を自称詞として使っているが、成長に伴い「わたし」「ぼく」などの人称代名詞を用い始める。こういった現象は、世界中で広く一般に認知されるところであろう。そしてそれが、自分と他者との区別がつく事、すなわち心の理論の形成と関連している事は言うまでもない。

しかしながら、前述したとおり我が国における自称詞の移行には、西川(2003)によればか

なりの男女差が見られる。男児は幼児期には「なまえ・愛称」と「ぼく」「おれ」を並行して使い、これらを状況に応じて使い分けているのに対して、女児には男児の様な使い分けは見られず、6 歳までは 95%もの子どもが「なまえ・愛称」を自称詞として使用する。一般には言語発達が早いとされる女児の方が、いつまでも自称詞として対称詞を使い、男児の方が代名詞に早く移行し始めるのはいったいどういう理由によるのであろうか。この問題に関して西川は、男性自称詞である「オレ」という自称詞に注目して、その使い分けや発達的変化について調査・研究をすすめた結果、以下のような解釈をした。「オレ」という自称詞は自己主張の道具としての機能や、友人関係を確認しあう機能を持っている。また、「オレ」という男性特有の自称詞は、これを用いることにより男らしさが誇示される。男児はこれを使用することにより自我状態をアピールしているが、一方で「オレ」に相当する自称詞を持たない女児は、男児に比べ長い間なまえや愛称などの対称詞を使うと考えた。また、「わたし」という自称詞の持つフォーマリティの高さも、女児が「なまえ・愛称」を使い続ける事の一因であるとも述べており、女児のこういった傾向は、自他未分化である事に起因するものではないとしている。

女性は大人になってからも場面によっては愛称やなまえを自称詞として使う傾向がある事が報告されている（白石；2012)。テレビのバラエティー番組などでも、若い女性タレントがこのような事をしているのを時々耳にする。守は学生が使用する自称詞の調査を継続的に実施しているが（未発表)、本校の女子学生に関しても、その数は減少傾向にあるものの、約 10%が友人との会話においてはなまえや愛称を自称詞として用いている。他方、近隣大学や高等専門学校においての調査では、男子学生にはこのような事は全く見られない。試みに、当該女子学生たちにこのような自称詞を使い続ける理由を訊ねてみたところ、「なまえの方が**かわいい**から」「**わたし**というのは気取っているみたいで恥ずかしいから」などという答えが返ってきた。要するに、女子がいつまでもなまえや愛称などを自称詞として使い続けるのは、「わたし」がそのフォーマリティの高さから敬遠される事に加えて、なまえや愛称を使用する事による未熟さを**かわいらしい**と感じ、これが女性性として好ましいと捉えている事に起因しているとも考えられる。そうであるとしたら、幼児期においても、男児が早い時期から「おれ」を使って男性性を強調するのと同様に、女児もなまえや愛称などを使い続ける事で、女性としてのかわいらしさ強調しているのかもしれない。

いずれにしても、わが国においては自称詞の使い方に男女差があり、発達的に見ても興味深い男女差の報告がなされてきている。特に前述してきた西川は、その分析において数々の功績を残してきている。しかしながら、西川の調査は対象がわずかの園に限定されており、年齢ごとの調査対象者数が少ない事が、調査結果に影響している可能性が考えられる。実際に、西川（2002）でも、当時の人気アニメの影響で女児に「うち」という自称詞の流行があったり、別の園では「ぼくちん」という自称詞の流行があったりした事が報告されている。このように、子どもたちが使用する自称詞には、その時期のクラス内の同調や、クラス構成メンバーのパワーバランスなどにより特有の偏りが生じることが考えられる。

そういった事から、調査対象は少数の園に限定されるのではなく、幅広くサンプリングがなされる必要があるだろう。また、西川の調査から既に十数年が経過している。若い世代のことばの中性化が小林（1993)により検証された事に始まり、その後も日本語における男女差は少なくなってきているという報告は数多くなされてきている（安田;1999、高崎;2004、山中；2008)。こういった時代の流れによる言葉の変化に伴って、子どもたちの自称詞使用にも変化が生じているかもしれない。

これらの事から、守は長野市とその近郊の幼稚園・保育園を幅広く対象とし、大規模なサンプルをもって自称詞使用の実態調査を行う事とした。

目的

園児たちが園で主としてどのような自称詞を使用しているかを調査し、発達段階による変化や男女差を明らかにする。

方法

調査時期：2015 年 6 月末

調査対象：長野市およびその近郊の幼稚園・保育園に在籍する園児

調査方法：卒業後 15 年以内の卒業生に調査用紙を送付し、現職の保育者から回答を得た

調査用紙：別紙のとおり（文末に添付）

結果

本校卒業時に、幼稚園・保育園に就職した 436 名の卒業生の実家（卒業時の住所）に調査用紙を送付し、2015 年 6 月末現在、幼稚園・保育園でクラスを担当している保育者のみに回答を依頼したところ 67 名からの有効回答を得た。

調査対象児数は 1576 名であった。内わけ人数は、以下のとおりである。

男児 756 名（　0－1 歳：71　　2 歳：91　　年少：214　　年中：158　　年長：222　）

女児 820 名（　0－1 歳：90　　2 歳：108　　年少：236　　年中：155　　年長：231　）

子どもたちが、幼稚園・保育園において 6 月末時点で、主として使用している自称詞を、年齢および男女別に集計した。その結果を表 1 に示す。

また、各自称詞が使用されている割合を、表 2（男児）および表 3（女児）に示す。なまえと愛称は、どちらも周囲の大人から呼ばれている呼称をそのまま使用していると考えられるため、ここでは併せて扱う事とし、「なまえ・愛称」と表記する。

表 1　各自称詞における年齢及び男女別使用人数

	0-1 歳		2 歳		年少		年中		年長		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
1　なまえ	4	15	33	34	57	74	48	71	38	79	
2　愛称	6	9	39	61	80	104	24	38	33	66	
3　わたし		1		1		25	2	44		81	
4　ぼく					34	1	44		67		
5　うち							2	1	1	2	
6　おれ					2		26		78		
7　おら					1						
8　わし											
9　自分											
10　使わない	61	65	18	12	34	26	11	1	5	3	
11　わからない			1		6	6					
12　その他							1				
計	71	90	91	108	214	236	158	155	222	231	1576

表 1～表 3 からわかるように、男女とも 0－1 歳児クラスのうちから、なまえや愛称などを自称詞として使う子どもが出始めてくるが、その数はわずかである。そして、2 歳児クラスになると、男女とも多くの子どもたちが「なまえ・愛称」を自称詞として用いるようになる。0－1 歳児クラスは、4 月の時点で 4 か月児から 1 歳 11 か月児までの子どもがおり、本調査は 6 月末時点でのものであるから、ごく一部の子どもが 2 歳の誕生日を迎えているという状況である。これらの状況から推察して、西川の調査同様 2 歳を過ぎた頃から自称詞を使い始めるという事がここでも確認されたと言えよう。

年少クラス（以下年少と略す）では、一部の子どもが、「なまえ・愛称」を卒業して人称代名詞を使うようになる。内わけをみると、男児では「ぼく」が多く、女児では「わたし」が多い。そして、年中クラス（以下年中と略す）ではこの移行傾向がさらに進み、より多くの子どもたちが人称代名詞を使うようになるが、年少時には「ぼく」が圧倒的に多かった男児に変化が見られ、「おれ」が増えてくる。女児はあいかわらず「わたし」がほとんどである。年長クラス（以下年長と略す）になると、男児は年中時で見られた変化にさらに拍車がかかり、多くの子どもが「なまえ・愛称」を卒業して人称代名詞を使用するようになる。内わけも「ぼく」と「おれ」に逆転が見られ、男児が園で使用する自称詞は「おれ」が第一位になった。女児の使用する人称代名詞は、引き続き「わたし」のほぼ一択であり、加えて、「なまえ・愛称」からこちらへの移行は、男児に比べてずっと緩やかなものである。

表 2　男児における各自称詞の年齢別使用比率（%）

		0-1 歳	2 歳	年少	年中	年長
1	なまえ・愛称	14.1	79.1	64.0	45.6	32.0
2	わたし				1.3	
3	ぼく			15.9	27.8	30.2
4	うち				1.3	0.5
5	おれ			1.0	16.5	35.1
6	おら			0.5		
7	その他					
8	使わない	85.9	19.8	15.9	7.0	2.3
9	わからない		1.1	2.8	0.6	
		100	100	100	100	100

表 3　女児における各自称詞の年齢別使用比率（%）

		0-1 歳	2 歳	年少	年中	年長
1	なまえ・愛称	26.7	88.0	75.5	70.3	62.8
2	わたし	1.1	0.9	10.6	28.4	35.1
3	ぼく			0.4		
4	うち				0.6	0.9
5	おれ					
6	おら					
7	その他					
8	使わない	72.2	11.1	11.0	0.6	1.3
9	わからない			2.5		
		100	100	100	100	100

「なまえ・愛称」と「人称代名詞」それぞれが、各年齢でどの程度使用されているか、その比率の変化を男女別に示したものが図 1 および図 2 である。ここでは、人称代名詞への移行を焦点とするため、「わたし」、「ぼく」、「おれ」、「うち」などすべてをひとまとめにして、「人称代名詞」として示す。

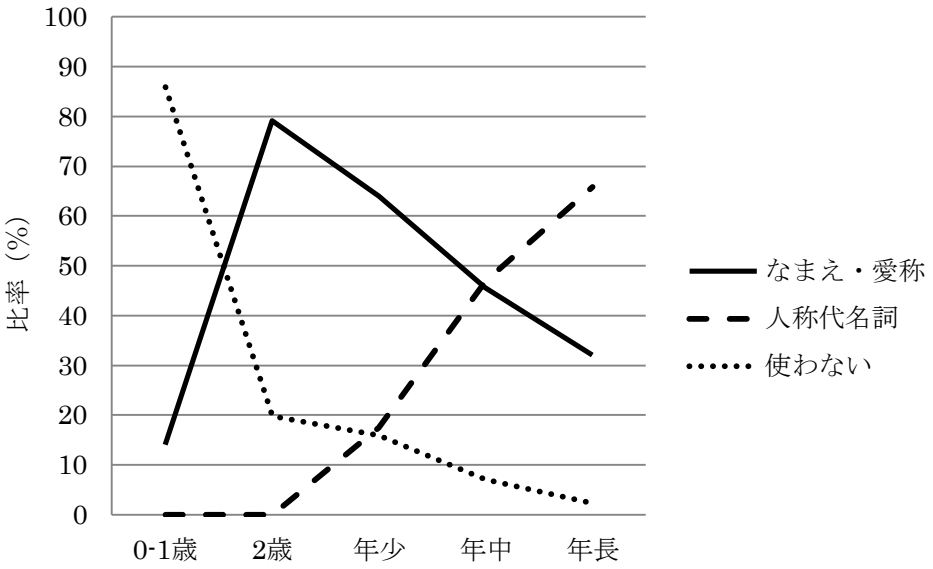


図1　男児における使用自称詞の推移

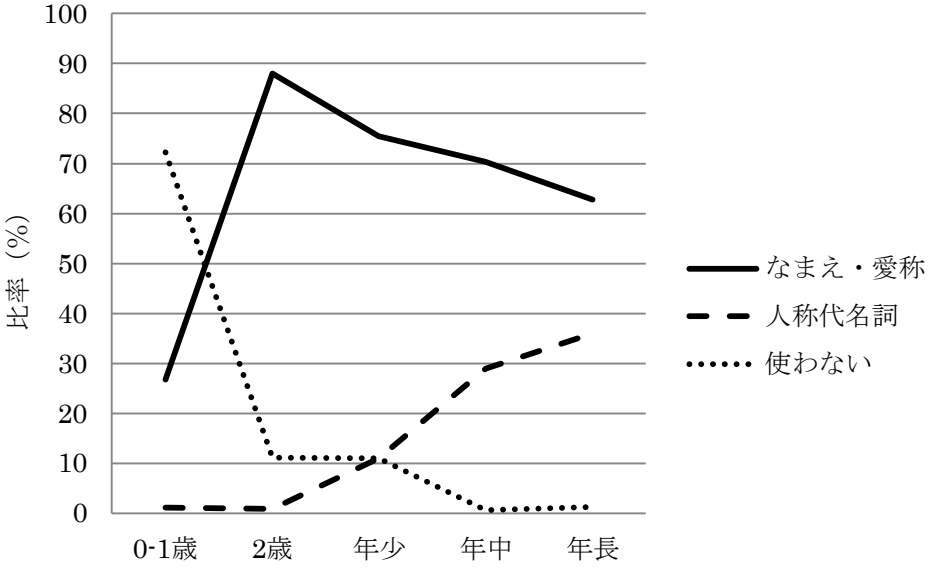


図2　女児における使用自称詞の推移

図 1 および図 2 からわかるように、男女とも 2 歳児クラスで急速に自称詞として「なまえ・愛称」を使い始める。その後それは減少し、代って「人称代名詞」が増えてくるが、西川の報告同様、男女差が大きい。男児においては、年中で「なまえ・愛称」を使用する子どもと「人称代名詞」を使用する子どもがほぼ拮抗し、その後は一気に逆転する。年長

になった時点では、その比率は約１：２となり、３分の２の子どもたちは「なまえ・愛称」をやめて「人称代名詞」に移行している。一方、女児においてはその変化が緩やかで、年長時では、「なまえ・愛称」を使う子どもと「人称代名詞」を使う子どもの比率は男児とは逆の２：１であり、「人称代名詞」を使う子どもは３分の１にとどまる。

各年齢において、性差と使用自称詞を要因とするカイ 2 乗検定を行ったところ、下記のような結果が見出された。有意差が見出された場合は、それぞれについて実測値と期待値間における 5%水準での残差分析を行った。

・0-1 歳

$\chi 2(2)= 4.715$　$.05 < p < .10$　有意傾向が見られた。

残差分析を行った結果、「使わない」という項目で有意差が見られた。男児は自称詞が出現していない子どもの数が有意に多く、女児は有意に少ない。また、「なまえ・愛称」に関しては、男児は有意に少なく、女児は有意に多いという結果となった。これらの事から、自称詞の出現は女児の方が早いと言える。

・2 歳

$\chi 2(2)= 3.762$　ns　有意差は見出されていない。

男女とも、一気に自称詞を使い始めるが、どちらも「なまえ・愛称」がほとんどであり、人称代名詞は出現していない。男女とも、どの項目でも期待値と実測値の間に差は見られなかった。よって、男女差もないと言える。

・年少

$\chi 2(2)= 7.237$　$p < .05$*　5%水準で有意差が見られた。

残差分析を行ったところ、「なまえ・愛称」の使用において、男女とも有意差が見られた。男児は期待値より有意に少なく、女児は有意に多い。この結果から、女児の方が、自称詞として「なまえ・愛称」を多く使用していると言える。「人称代名詞」の使用に関しては、有意傾向にとどまった（男児は期待値より大きく、女児は小さい）。

・年中

$\chi 2(2)= 22.952$　$p < .01$**　1%水準での有意差が見られた。

残差分析を行ったところ、すべての項目において男女とも有意差が見られた。「なまえ・愛称」では男児は期待値より有意に少なく、女児は有意に多い。「人称代名詞」では男児が有意に多く女児は有意に少ない。「使用しない」では男児は有意に多く、女児は有意に少ない。これらから、年中では、男児の方が早く人称代名詞に移行し、女児はなまえや愛称を使い続けている事がわかる。また、この時期になっても未だ自称詞を使わない子どもは男児に多いという事も言える。

・年長

$\chi 2(2)= 43.022$　$p < .01$**　1%水準での有意差が見られた。

残差分析の結果、「なまえ・愛称」および「人称代名詞」において、有意差が見られた。まず、「なまえ・愛称」においては、男児は有意に少なく、女児は有意に多い。「人称代

名詞」においては、男児が有意に多く、女児は有意に少ない。これらの事から、「なまえ・愛称」から「人称代名詞」への移行が男児の方が早いという年中時に見られた傾向が、さらに続いていると言える。

結果の要約

以上の事から結果をまとめると、下記の 3 点に集約できる。

①男女とも 2 歳頃から、なまえや愛称などの自称詞を使い始める子どもが出てくる。女児の方が早く出現する。

②はじめは、自称詞としてなまえや愛称を使っていた子どもたちであるが、成長とともに人称代名詞に移行して行く。その移行は男児の方が女児よりも顕著である。

③年長になった時点では、男児の方が女児よりもはるかに多くの子どもたちが人称代名詞を使っており、種類も多様である。女児はなまえや愛称を使い続ける子どもが多いが、人称代名詞を用いている子どもも 35%以上おり、西川の調査とはかなりの開きが見られた。

考察

調査の結果は、西川と同様、幼児期の男児が使用する自称詞は、発達に伴ってなまえや愛称から人称代名詞である「ぼく」「おれ」などへの移行が顕著に進んでいくが、女児は男児に比べなまえや愛称を使い続ける傾向が見られた。しかし、西川の調査では 6 歳までは 95%の女児がなまえや愛称をよく使う自称詞として用いていたのに比べ、本調査では年長でこの割合は 62.8%にとどまっていた。6 月の調査時点では、まだ 6 歳の誕生日を迎えていない子どもが多かったと思われるにも関わらずこの数値であり、またこの時点で、36%の女児は人称代名詞を用いている事もわかった。つまり、本研究では、西川の様な「女児にはあまり変化は見られない」という事はなかったと言えよう。この違いは、本調査が西川の調査から 13 年経過している事による社会の変化の他に、地域による特性も考えられる。

西川の調査との比較においては、女児にも幼児期から人称代名詞を使う様子が見られたが、男児と比較するとその割合はずっと低い。自称詞そのものは、女児の方が早くから出現しているにも関わらず、なぜ女児の方がいつまでもなまえや愛称を使い続け、人称代名詞への移行が遅れるのであろうか。その理由について考察していきたい。

女児が用いている人称代名詞のほとんどが「わたし」であった。「うち」を用いている子どももいるが、その数はごくわずかである（年中 1 名、年長 2 名）事から、この時点では前述したような特定の自称詞の流行はなかったと思われる。つまり、女児の使用する人称代名詞イコール「わたし」であり、それ以外を用いる子どもはごく少数のマイノリティという事になる。園という集団の同調圧力がかかる社会の中で、極端なマイノリティになるのは勇気のいることであり、女児たちは必然的に「わたし」を選ばざるを得ない状況に

置かれていると言えるであろう。そうなると、女児がなまえや愛称から人称代名詞になかなか移行が進まない事の背景には、「わたし」という自称詞そのものに、なんらかの原因があると考えられるのではないだろうか。まず、その点から考えてみたい。

西川も述べているように、「わたし」という自称詞のフォーマリティが高いというのは確かな事であろう。大人の社会でも、目上の人に対しての発言や公式な場での発言など、どのような場合でも「わたし」という自称詞を用いていれば、決して失礼にならず、誰からも咎められたり不快感を抱かれたりすることはない。子どもたちにしてみれば、「〇〇ちゃんが」などと幼い自称詞を使って自分を示していた状態から、いきなりこの「わたし」という大人たちがかしこまった場でも用いている自称詞に移行するのは、ギャップが大きすぎるという事が考えられる。大人っぽくふるまいたいという気持ちから「わたし」を使用する女児もいるであろうが、男児たちが使う「ぼく」や「おれ」に比べて、このフォーマリティの高さから生じる大きなギャップは、移行のハードルを高いものにしているであろう。

しかしながら、このようなフォーマリティの高さを持つ一方で、「わたし」という自称詞は、老若男女の誰もが、どんな場面でも、誰に対してでも使えるという意味では、たいへん普遍的であり、平凡で魅力に欠けるものであるとも言える。男児は、ある時は「おれ」という男性自称詞を使って男である事を誇示したり、いばったり、仲間意識を強めたりする。そして、ある時は「ぼく」を使っていい子ぶり、またある時は「〇〇クンも欲しい」などと甘えてみせるといった具合に、自称詞を状況に応じて自在に操る事ができるのである。これは、自我が強まり自己主張をしたがる幼児期の子どもたちにとって、おおいに満足感が得られる事であろう。そして男児は、将来的には公式の場面で使わざるを得なくなる「わたし」という自称詞を、幼いうちに選ぶ事はまずない。あえてこの魅力に欠ける自称詞を選択する気にはならないのであろう。女児にとっても、大人っぽくふるまいたい気持ちがあるとしても、慣れ親しんだ「なまえ・愛称」を捨てていち早く移行したいと思うほどの魅力を、「わたし」という自称詞は持っていないのではないだろうか。「わたし」を使うより、なまえや愛称の方がはるかに自分のアイデンティティを誇示する事ができるのである。

性役割観の視点から考えてみたい。前述してきたように、男児が「おれ」を使って男らしさをアピールするのに対して、女児にはこれにあたる女らしさをアピールするような自称詞が存在していない。男の子は「おれ」というあまり品の良くない自称詞を使ったり、それに伴って乱暴な言葉使いをしたりしても許されるのに、女の子だけが「わたし」というきちんとした自称詞を使わなくてはならず、また、それに伴ってきれいな言葉を使いなさいという圧力が社会からかけられている事を、本人たちも何となく感じるのではないだろうか。「わたし」というのは大人びてきちんとしているが、「女らしさ」イコール「きちんとしている」事というのは、どうにも納得できず、なぜ女の子だけが行儀よくしなければならないのだろうと理不尽さを感じる子どもがいても不思議ではない。

そこで、「きちんとしている」事以上に、女児が女の子らしさとして好ましいと捉える概念は何かと考えると、それは「かわいい」事ではないだろうか。守（2010）の大学生における性役割認知の調査では、男女の性役割観において、最も顕著に女性側だけに強く期待されているものが「かわいい」事であるという結果が出た。これは男子学生から期待をかけられているばかりではなく、女子学生自身も自らの性役割観として望ましいと認識しているものであった。この事から、女児たちも女子学生同様、女の子らしさとして「かわいさ」を好ましいものであると認知している可能性が考えられる。

女子大学生における「かわいい」という感覚について分析を行った三浦(2012)は、「かわいい」には、本来の意味であるベビースキーマ（小さい、幼い、柔らかいなど）に加えて、おしゃれに関わる因子（美しい、華やかなど）が付与されている事を明らかにした。女子学生ばかりでなく多くの日本人において、「かわいい女性」と聞いた際にイメージされる人物像は、身長が 170cm を超えるミス・ユニバース日本代表候補者たちよりも、どちらかというと小柄で童顔な、アイドルグループにいるような女性たちであろう。また、知的で完璧に何でもこなす女性より、天然と呼ばれるようなどこか不完全な要素を持つ女性たちであろう。ただ小柄で童顔、未熟なふるまいだけで「かわいい」わけではなく、美しさや華やかさも重要であり、未熟さと美しさを兼ね備えた状態こそ、女子大生が女性性として好ましいとする「かわいさ」であると考えられる。この、女子大生の持つ「かわいい」と同様の感覚の「かわいさ」を女児が女性性として好ましいと捉えているかどうかは不明であり、未だ幼く成長期にある女児たちが、わざわざさらに未熟な状態の「かわいさ」を好ましいものとして受け入れるかどうかは疑問である。しかし、もし両者の感覚が近いものであるとしたら、女児たちも「わたし」という大人びた自称詞を使うより、なまえや愛称など未熟な発達段階の自称詞を使う方が「かわいくて女の子として好ましい」と感じているかもしれない。

女子大学生が自らの性役割において、「かわいい」という事を強く期待しているのは前述のとおりであるが、守の調査では同時に、20 年間で大学生の性役割観が大きく変わり、男女に望まれる役割期待の差が大きく縮まる中性化の傾向が確認されている。女性性として「かわいい」事が両性から強く期待されているとは言っても、その程度は 20 年間で低下し、期待値の男女差も小さくなった。この事から考えて、女性はわざと未熟なふりをするいわゆる「かわいこぶりっこ」をする必要性が前世代より減ってきていると思われる。前世代のアイドルは、「〇〇子、わかんな～い」などとわざわざ未熟な言葉を甘えた声で発し、すぐに泣いたり口を尖らせてすねてみせたりする事で「かわいい」と評価され人気を得た。青年期になった女性が、自称詞としてなまえや愛称を使う事も、この「かわいこぶりっこ」のひとつであると考えられる。性役割観の変化に伴い、わざと未熟なふりをしてまで「かわいい」状態でいる事の重要性が低くなってきているとしたら、女性が未熟な自称詞である「なまえ・愛称」を使い続けるという現象も、減少の方向へ進むと考えられる。実際にこの傾向は、守の学生を対象とした使用自称詞調査で確かめられており、自称詞と

してなまえや愛称を使用する女子学生は、10 年間で激減した。10 年前には友人関係においては 3 割以上の学生が「なまえ・愛称」を使用していたが、現在は 1 割にまで減少しているのである。西川の調査時から、本調査時までに 13 年が経過している。女子学生に見られたこのような変化の傾向が、女児にも同様に出現したと考えられるのではないだろうか。

女児たちは、男児が持つ「おれ」の様な自らの性をアピールできる自称詞を持たず、「なまえ・愛称」の使用は未熟さのアピールになるし、「わたし」は魅力に欠けるから使う気になれないとなってくると、何か別の自称詞が登場しても良さそうなものである。この事から、実のところ筆者は調査実施前には「うち」がもっと多用されていると予想していた。学生における調査で、年々「うち」の使用が増え続け、今年度の調査ではついに「わたし」を抜いて女子学生の使用自称詞の第一位になったからである。有松ら（2011）が近畿地方の大学で行った調査における報告では、2011 年にはすでに「うち」が第一位であったことから、関西圏はこの傾向がさらに強いと考えられる。「うち」は「わたし」に比べフォーマリティが低い事から、「おれ」同様に気楽な仲間同士の会話で使いやすいし、「なまえ・愛称」の様に子どもっぽくもない。また、男女ともに使える中性性を持つため、女性性を押しつけられる感じもしない。公式の場では使えないが、たしなめられる言葉でもない。こういった事から、女子学生たちが好んで使用するのは当然の事と思われる。青年期の学生たちが多用している自称詞であるから、幼児期の子どもたちにももう少し広まっていると考えていたが、結果はごく少数の子どものみの使用であった。これは、園児の母親世代には、まだ「わたし」使用者が多い事を反映していると思われる。

以上の事から、守は子どもたちの使用自称詞に関する今後の変化について、次の様に予想している。

「うち」使用が多数派となった今の学生たちが母親世代になる頃には、女児たちの使用自称詞の中で「うち」の占める割合が増え、「なまえ・愛称」は減少していくであろう。「わたし」に関しては、使用自称詞の選択肢が増えることでむしろ抵抗がなくなり、大人ぶったりいい子ぶったりできる事から、使用する女児は減る事もないであろう。そうなってくると、やっと女児にも男児の様に、場面や相手に合わせて自称詞を使い分ける事ができる時代がやってくると言える。また、男女の性役割観が中性化に向かい、言語に関しても男女差がなくなり中性化の様相を見せている事から考えると、女児ばかりでなく、男児にも変化が見られるかもしれない。例えば、男児たちも、男性言語とされる「おれ」をわざわざ選ばなくなってくる可能性もある。「おれ」は、その使用に制約も多く気を遣わなければならない自称詞である。前世代ほど男らしさをアピールする必要がなくなってくれば、男児たちもわざわざ気を遣って使用しなければならない「おれ」を使わず、親しさをアピールする際には「うち」を使うようになっていく可能性もある。将来的に、日本の子どもたちが使う自称詞がどのように変化していくのか、たいへん興味深いところであり、今後も継続して調査していきたいと考えている。

引用文献

有松しづよ・皆川晶　(2011)　キャンパス内における女子大学生の使用自称詞とその選択基準－日本語教育における自称詞の提示に係る基盤研究として－　近畿大学産業理工学部かやのもり　15, 37-41

小林美恵子　(1993)　世代と女性語－若い世代のことばの「中性化」について－　日本語学臨時増刊号 12-6　181-192

小森由里　(2008)　自称詞にみられるスタイル変異 ： 親族の事例より 日本女子大学英米文学研究 43, [1]-20, 2008-03

三浦欽也　(2012)　女子大学生における「かわいい」感覚の構造について　神戸女学院大学論集　59, 63-73

守秀子　(2010)　大学生における性役割認知の変化　文化女子大学長野専門学校研究紀要 2, 19-32

西川由紀子　(2002)　５歳児女児は自称詞をどのように使っているか？－うちブームに着目して－　華頂短期大学研究紀要　47, 88-101

西川由紀子　(2003)　子どもの自称詞の使い分け :「オレ」という自称詞に注目して　発達心理学研究、　14, 1, 25-28

緒方隆文　(2015)　呼称のカテゴリー分析 - 自称詞・対称詞・他称詞 -　筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要 10, 1-13

白石優子　(2012) 幼児期と青年期における自称詞使用の様相と自己の意識　人間科学研究　Vol.25, Supplement, 125

鈴木孝夫　(1973)　ことばと文化　岩波新書

鈴木孝夫　(1982)　自称詞と対称詞の比較 日英語比較講座　第５巻　文化と社会 17-59. 大修館書店

高崎みどり　(2004)　話し言葉の性差－男性の「女性語」使用とジェンダーの関わりに注目して　明治大学人文科学研究所要綱　54, 161-173

山中安子　(2008)　現代日本語の性差に関する研究－文末表現を中心に－　東京女子大学言語文化研究　17, 87-100

安田芳子・小川小百合・品川なぎさ　(1999) 現代日本語における男女差の現れと日本語教育　－意識・実態調査の分析－　小出記念　日本語教育研究会論文集 7, 73-87

付記

本研究の調査にあたり、ご協力をいただきました多くの卒業生の皆様に、心よりお礼申し上げます。

【別紙】

自称詞に関する発達的調査

文化学園長野専門学校　准教授
守　秀子（発達心理学担当）

担当クラスのお子さんたちが、園にいる時に使用している一人称自称詞について、以下の質問にお答えください。

（発達による変化という視点からの調査ですから、縦割りなど、複数の年齢のお子さんが混在するクラスの場合は、ご回答いただかなくて結構です。）

自称詞調査

お子さんたちは、園で会話をする際、自分の事をどのように表現して（呼んで）いるでしょうか。下記の 1～12 の中から選んで、それぞれに該当する**人数**を、男女別にお答えください。

なお、複数の自称詞を使っているお子さんの場合は、多く使用していると思われる方を選んでください。

	使っている自称詞	人数	
		男児	女児
1	自分のなまえ（けんた、みき　など）		
2	ニックネーム（なまえに“ちゃん”や“くん”などをつけたものを含む）		
3	わたし		
4	ぼく		
5	うち		
6	おれ		
7	おら		
8	わし		
9	自分		
10	自称詞は使わない（使えない）		
11	わからない		
12	その他（以下に具体的にお書きください）		

担当クラスの年齢を〇で囲んでください（　未満児 0~1 歳　　2 歳　　年少　　年中　　年長　）

ご回答年月日　　平成　27 年　　月　　日　　ご協力ありがとうございました。

模擬保育における視覚教材の有効性の検証

－内発的動機づけの視点から－

宮原　千秋

An Examination of Effectiveness of Visual Teaching Aids
in Nursery Education Practices: From a Viewpoint of Intrinsic Motivation

MIYABARA, Chiaki

キーワード：視覚教材、内発的動機づけ、模擬保育、保育者と子ども間の相互作用

1　はじめに

幼児期における保育者の役割は子どもの育ちを理解することである。その上で、時間的ゆとりを考慮しながら、子どもが自発的に遊びこめる環境設定をして、自ら伸びようとしている力を支援していく存在であることが理想である。また一方で、保育者から子どもへの意図的な遊びの提案は、遊びの幅を広げるための動機づけとしても有効である。その保育は、子どもが「またやりたい」、「面白かった」と思えるような内容であり、その活動の後も子どもが自発的かつ持続的に取り組めるようにしていきたい。そのためには、子どもが活動自体に興味をもち、活動自体を楽しんでいる状態であることが望ましい。多少の困難があっても一丸となって解決策を見つけ出し、自らの意志でそれを成し遂げようと努力している状態。すなわち、子どもが内発的に動機づけられて活動している状態である。このような状態で活動に取り組む子どもたちの喜びや達成感は、保育者の指示に従うだけの受け身的な活動と比べてはるかに大きい。そして、子どもたちが達成感を味わっている姿を見ることにより、保育者も喜びや達成感をもてる。また、このような姿を見ることにより保育者は子どもたちの成長を確認し、次なるステップへ繋げるための意欲も湧いてくる。

筆者は、保育者として幼児教育に携わった経験から前述のようなことを強く感じ、幼児教育の現場で子どもがもつ素晴らしい力を引き出すことや子どもが活動へ向かう意欲を大切にしてきた。また、現場での保育実践の中で、子どもの内発的動機づけを高めるために

視覚教材を利用することが非常に効果的であると感じてきた。言語による説明は抽象的であり、幼児期の子どもの認知処理能力では内容を理解するのが難しい場合がある。そのため、言語による説明だけでは、心の中にある子どもの「わくわく感」を引き出すところまでは持っていけない。やはり、視覚に訴えることの効果は絶大である。さらにその教材が、保育者自身の渾身の作であることが一層その効果を高めることも、身を以って経験してきた。保育者は活動に意図をもち、指導計画作成から保育当日に至るまでに子どもの表情を思い浮かべながら、子どもがわくわくするような教材を用意する。このような実践を通して、子どもが活動へ向かう意欲の源は保育者自身にあるということを日々感じてきた。保育者が子どもたちのために思いを込めることで、子どもが活き活きとし、保育者にとっても有意義な時間となる。本研究では、このような保育者と子どもの相互作用とも言える過程の中で、視覚教材が保育者と子ども双方の内発的動機づけを高めるのではないかという点について検討したい。

筆者は現在、幼稚園教諭・保育士養成課程の「教職に関する科目」「保育の内容・方法に関する科目」の「健康指導法」（演習：1 単位　必修）を担当している。これは幼稚園教育要領に示されている五領域の一つである心身の健康に関する領域「健康」にかかわる科目である（以下、領域「健康」とする）。幼稚園教育要領解説（文部科学省, 2008）には、領域「健康」のねらいの重要なポイントとして、「自分の体を十分に動かし、幼児が体を動かす気持ちよさを感じることを通じて進んで体を動かそうとする意欲などを育てようとすることが大切である」ということが明記されている。近年、子どもたちを取り巻く環境が変化しており、運動能力の低下やそれに伴う心の変化が生じている。このような状況の中で、子どもたちが進んで体を動かそうとする意欲を育てるためには、保育者の力量が必要不可欠な時代になってきている。学生たちにこういった力を身につけさせることは、養成校の課題でもある。

これまで、筆者は学生に子どもが本来もつ素晴らしい力を引き出すことや活動へ向かう意欲を大切にする保育者になって欲しいと考え、授業の中で色々な工夫をしてきたが、どうしても体系的な専門知識や技術を身につけさせることに留まってしまっていた。しかし、このような知識や技術が実践力となって発揮されるためには、体を動かす遊びの実体験とその振り返りこそが重要であると考えるようになった。そこで筆者は、学生自身が指導計画の作成と実践、考察を行う模擬保育を導入することにした。模擬保育とは、実際の保育現場で保育者と子どもが活動をするように、学生が保育者や子どもになりきり保育場面を想定することを指す。学生に手段や方法を全て教えてしまうことは簡単である。しかし、模擬保育を通して、学生自らが心で考え立案、実践、省察を繰り返す中で次第に自分のすべきことを感じ取り、自分の手で探り出していくことが重要であろう。

以上より、本研究では、授業の一環として模擬保育を計画・実施し、その中で視覚教材の有効性について内発的動機づけという視点から検討する。また、模擬保育を通して、学生自身が立案、実践、省察を繰り返すことで、子どもの理解に基づいた保育や子どもの自

発的な活動意欲をかきたてる保育の大切さについて学ぶことを目指した。

2　目的

本研究の目的は以下の 2 点である。

（1）模擬保育授業を通じて、内発的動機づけという視点から視覚教材提示の有効性を検証する。なお、仮説は以下の通りである。

仮説 1： 視覚教材の提示をすることで、子どもが内発的に動機づけられるのではないか。

仮説 2： 子どもが活き活きとし、輝く表情を引き出すために、視覚教材の研究をすることにより保育者自身のモチベーションが高まるのではないか。

（2）模擬保育授業を通じて、学生が立案から振り返りまでの「計画を立てる力」、「それに沿って実践する力」、「考察する力」のサイクルを学び、1 周ごとにサイクルを向上させる。

3　方法

以下のような流れで、実証研究を行った。

（1）模擬保育は、保育科 1 年 32 名のうち 1 名が保育者役、2 名が観察者、その他の学生が子ども役になり、毎回ローテーションして実施された（実施回数は 10 回）。

（2）保育者役の学生は事前に、教科書、雑誌等を参考に遊びのアイディアを出し、指導計画を立案する課題を与えられた。遊びの内容については、領域「健康」から幼児が楽しく体を動かす遊びという点のみ指定し、それ以外は自由とした。保育者役の学生は、模擬保育終了後、反省を提出し、その後改めて見直しをした。

（3）模擬保育実施後、振り返り会を行った。2 チームに分け、観察者を中心に学生間で意見を出し合い、指導者は最後に補足等をすることで、意図的な方向づけを行った。

（4）子どもと保育者双方の内発的動機づけという視点から視覚教材の有効性についてアンケートを実施した。アンケートの内容は以下の通りである。また、評定の理由について自由記述で回答を求めた。

	視覚教材を使った保育					視覚教材なしの保育				
①　子ども目線で	強く感じた		普通		そう思わない	強く感じた		普通		そう思わない
導入がわくわくした	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
この活動をやりたいという気持ちになった	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
②　保育者目線で	強く感じた		普通		そう思わない	強く感じた		普通		そう思わない
将来的に保育現場でこのようにしたい	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1

４　視覚教材提示の有効性の検証

(1)アンケート結果

領域「健康」に関わる幼児の遊びの中で、導入時または活動中、視覚教材が有る場合と視覚教材が無い場合で、子どもの内発的動機づけや将来の保育者像にどのような違いが見られるのか、比較検証を行った。以下にその結果を示す。

まず、表１に模擬保育で行われた遊びの内容のタイトルと視覚教材の有無を実施順に示した。表１の通り、回を重ねるにつれて、模擬保育の中で視覚教材が使用されることが多くなっていったことがわかる。

表１　模擬保育で行われた遊びの内容と視覚教材提示の有無

実施回	遊びの内容のタイトル	視覚教材提示の有無
1	しっぽ取り鬼	無
	手つなぎ鬼	無
2	大根抜き	無
	すわり鬼	無
3	あずき	無
	バナナ鬼	無
4	じゃんけん列車	有
	だるまさんの１日	無
5	椅子取りゲーム	無
	ハンカチ落とし	無
6	何でもバスケット	無
	猛獣（果物）狩りに行こう	有
7	輪くぐり競争	有
	爆弾ゲーム	有
8	三角鬼	有
	田鬼	有
9	フルーツバスケット	有
	子取り鬼	無
１０	王様バスケット	有
	ボール配達競争	無

次に、アンケートの結果を表２～４及び図１～３に示した。表２及び図１は、子ども目線で導入がわくわくしたかについて、表３及び図２は、子ども目線でこの活動をやりたいという気持ちになったかについて、表４及び図３は、保育者目線で、将来保育現場においてこのようにしたいかについて示したものである。タイトルは、それぞれ「子どもわくわく」、「子ども内発的動機づけ」、「現場でこのようにしたい」と略す。表２～４及び図１～３に示す通り全ての項目において、視覚提示あり群の方が高い結果となった。また、「子どもわくわく」、「子ども内発的動機づけ」、「現場でこのようにしたい」それぞれの項目に関して、視覚提示の有無を要因とした評定値について、被験者内分散分析を行った結果、表５の通り、全ての項目において高い有意水準で差が認められた。

評定の理由として、「目が惹かれて興味が湧く」、「視覚教材を使ってわくわく感をもってもらいたい」、「視覚教材があった方が子どもに伝わり易い」、「教材があった方が子どもの気持ちを掴める」、「絵を使うと子どもが注目する」、「子どもたちが集中できる」等の回答があった。

以上の結果から、視覚教材の有効性が示され、子ども目線からも保育者目線からも動機づけを高めるという点で、重要な要素の一つであることが確かめられたと言える。よって、仮説１の「視覚教材の提示をすることで、子どもが内発的に動機づけられるのではないか」及び、仮説 2 の「子どもの活き活きと輝く表情を引き出すために、視覚教材の研究をすることにより保育者自身のモチベーションが高まるのではないか」の両方が検証された結果となった。

表２　子どもわくわく　(n=32)

	非常に	割と	普通	あまり	全然
視覚教材あり	24	6	1	0	0
視覚教材なし	4	3	17	4	3

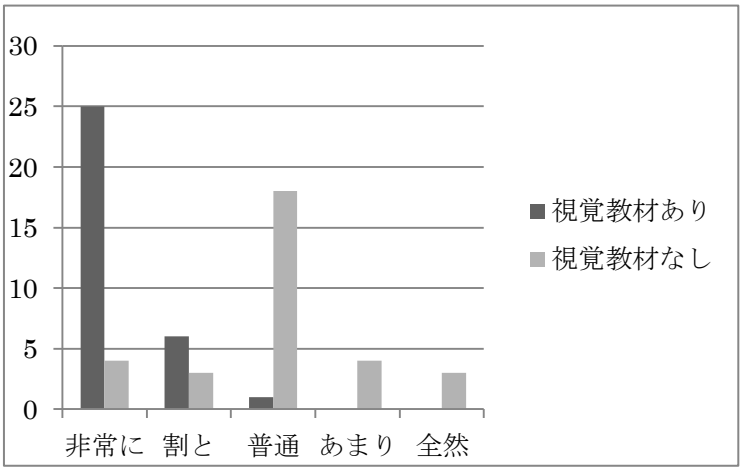


図１　子どもわくわく

表３　子ども内発的動機づけ（n=32）

	非常に	割と	普通	あまり	全然
視覚教材あり	22	8	1	0	0
視覚教材なし	4	9	11	4	3

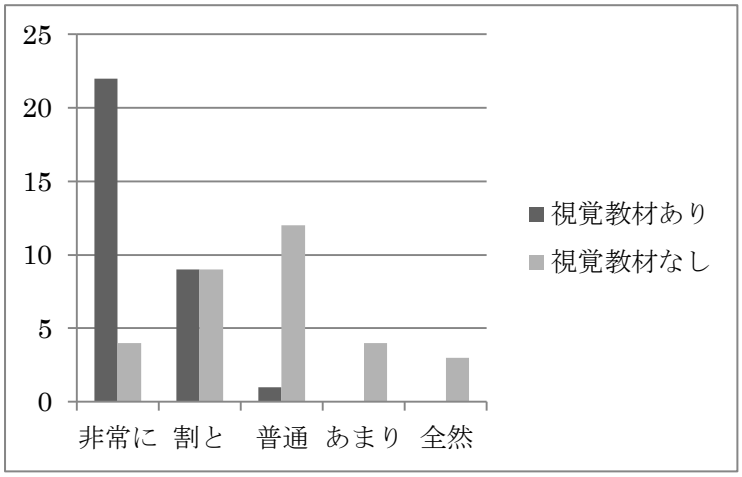


図２　子ども内発的動機づけ

表４　現場でこのようにしたい（n=32）

	非常に	割と	普通	あまり	全然
視覚教材あり	27	4	0	0	0
視覚教材なし	5	4	18	1	3

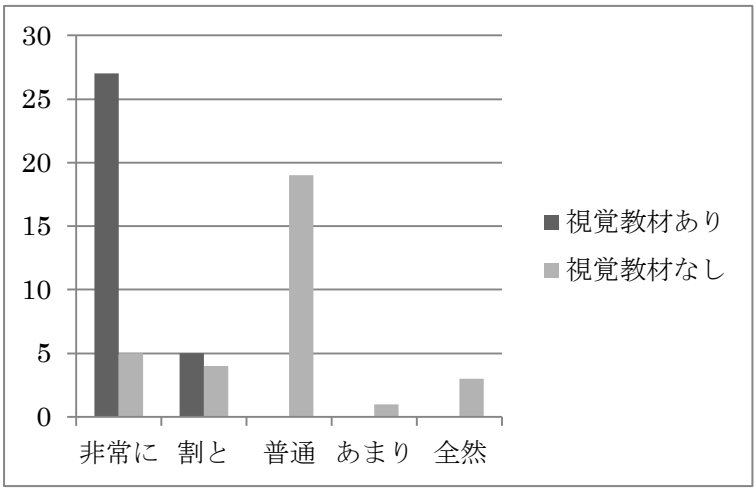


図３　現場でこのようにしたい

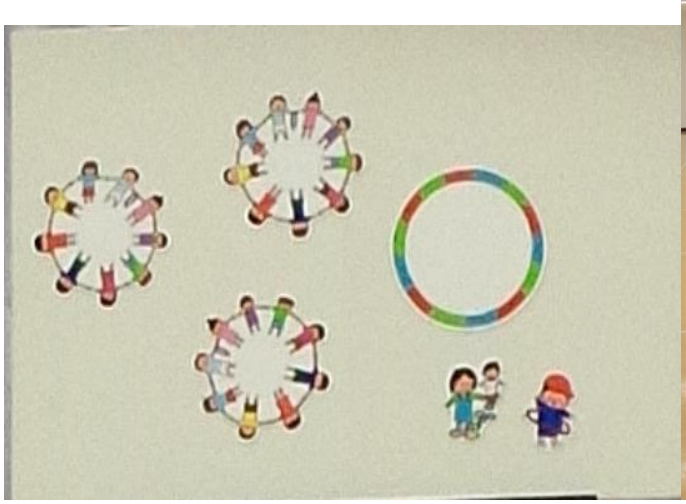
表5　視覚提示の有無による評定値の差（F 値のみ）

子どもわくわく	F = 61.24 **	（有　＞　無）
子ども内発的動機づけ	F = 35.20 **	（有　＞　無）
現場でこのようにしたい	F = 56.18 **	（有　＞　無）

p ** < 0.01

(2)模擬保育の経過

模擬保育では、学生 1 名が保育者役、その他の学生は子ども役になった。保育活動内容は前出の表１の通りで、保育者役の学生が自分の担当日までに活動を考えた。初回は、模擬保育についての先入観を入れず学生が計画した通りの活動を行った。学生が保育者になりきれず、子ども役も園児になりきれず、保育というよりは学生向けの楽しいレクリエーションとなった。これは筆者の想定内であり、子どもの年齢を明確に設定することの意味や、模擬保育に必要とすることを学生自身に考えてもらうという意図があった。筆者は視覚教材についても少しずつ方向づけをしていった。４回目、文字を表示し視覚で表す学生や、絵をプリントアウトし表示をする学生が出てきた。子ども役は視覚教材の大きさや教材の提示の仕方などに検討の必要があることを感じていた。筆者は、模擬保育後の振り返りも大切にしたく、このように感じていることを素直に表現し、学生同士活発に意見を出し合って次の活動へ繋げて欲しかった。しかし、学生はその場で何かを感じてはいるものの、いざ場を設けると意見を出さなかった。言いにくい場の雰囲気や、発言する恥ずかしさ、友だちへ意見できない、などといったことを感じているようであった。筆者はそれらの問題を打開するべく保育者役でも子ども役でもない観察者 2 名を設けた。観察者は客観的に活動を見て、ホワイトボードに良い点、改善点、課題点などのキーワードを書いていった。すると、学生はホワイトボードに注目し、書いてあることから話が膨らみ、少しずつ意見が出始めた。また、大勢ではなく人数を半分に分けることで気軽に意見を出し合えるようになっていった。その中で、学生は視覚教材の表示の仕方や教材に様々な工夫があると子どもの興味が湧くことに気づき始める。その後７回目以降から、ルール説明をする際にパネルシアターで表示したり、導入時にパペットを使いわくわくするような教材を作る保育者役の学生が出てきた。回を重ね、次々と保育者役の学生がそのような姿になると、「自分の時はもっとこうしたい」というように、内発的に動機づけられていく様子が見られた。その中で９回目のフルーツバスケットを取り上げたい。保育者役の学生は６回目のなんでもバスケットからのヒントと反省を活かし、視覚での提示や、子どもへの対応などを自分自身でイマジネーションし当日を迎えたようであった。保育者役の学生は導入時に



７回目　パネルでの視覚教材

10 回目　相談し合う子ども役

９回目　導入時の視覚教材

反省会の様子

象と家の絵をホワイトボードに張った。何が始まるのだろうと子ども役が目を輝かせた。そして象の口の中にフルーツが覗いている。家の中にも何かフルーツがあるようだと、子ども役にちらちらとフルーツを見せながら「何かな」と問いかけ、子ども役を引き付けている。フルーツの答えを皆で一斉に言うことで、活動に一体感を持たせていた。保育者役の学生は、絵だけでなくその上に文字をつけることで、自然に字が覚えられるようになって欲しいと願い、思いを込めて作ってきた。また、子ども役をもも、すいか、めろん、さくらんぼの４つのグループに分け、一人ひとりにそのフルーツのペンダントを作ってきた。子ども役は導入時から嬉しくて早くやりたい！とウキウキしている様子を見せていた。活動中も終始笑顔で、活動後もそのペンダントを手放さなかった。

この模擬保育では、子ども役の学生に「楽しんでほしい」、「わくわくしてほしい」という思いから、保育者役の学生の心の内に、自ら手の込んだ視覚教材を作ろうとする内発的動機が働いたことが感じ取れた。このことから、保育者のやる気、その気持ちこそが、子どもが内発的に動機づけられて行動する根底であることを再確認した。子どもが内発的に動機づけられるのはやりたいから、遊びたいから、といった子どもの内から出てくるものである。そのため保育者は、子どもがやりたいことを子どもが主体的に実現できるように環境や教材を整え支援していくものである。この保育者役の学生の場合、子どもが自ら遊びたくなるような視覚教材の提示があったため、子どもの内発的動機を引き出す事が出来ていたと考える。

フルーツバスケットの振り返りでは、導入時の視覚教材が子どもにとってわくわくしたという意見が多い中、「なぜ象と家なのか」と疑問を抱く子ども役もいた。振り返り会では「フルーツだから八百屋がいい」、「フルーツを暖簾から覗かせるのもいい」、「八百屋の手遊びから繋げていけば楽しい」という意見も出てきた。また、ペンダントは全てを保育者が作ってしまうのではなく、子どもが好きな果物を描き、自分で作ったことに意味をおくような保育であると、もっと主体的な活動に変化していくのではないかと感じることができていた。「もし自分が保育者役だったら」という思いで、反省を自分のものにしている学生は「自分の時はもっとこうしよう」と考えられ、更に内発的動機づけが高まっていった様子であった。

5　模擬保育における立案、実践、考察について

模擬保育授業の中で学生が立案、実践、考察のサイクルを知ることができ、回を重ねる毎に視覚教材も増え、向上していく様子が見られた。立案の時点で、アイディアが思うように出ず苦戦する学生もいた。しかし、この授業で良い活動をすることや成功するという結果を求めるのではなく、保育に対する気持ちや保育に至る全ての過程を大切にして欲しかった。模擬保育の中で計画通り(思った結果)にならなかった例を挙げる。保育者役の学生にモチベーションがあったにもかかわらず、学生が計画した遊びが子どもの姿に合わなかったケースである。その学生は指導者に相談し、教材の作成をするなど事前の準備はしていたものの、子ども役が楽しめなかった。このような時に「この状況を何とか立て直そう」と思う気持ちがあるかどうかが重要である。直ぐに「もう無理」、「仕方ない」と諦めてしまう学生も少なくない中この保育者役の学生は諦めなかった。子ども役から意見を聞き、良いと思う方法を取り入れ、一部ルールを変更することで楽しい活動へと変わっていった。全てこちらが意図した計画が子どもにとって楽しいものとは限らない。この場合保育者役の学生に「何とかしよう」、「楽しんでもらいたい」いう気持ちがあったからこそ活動に変化が見られたのである。この先現場に出て上手く活動が進まない時、諦めて直ぐに終わりにせず、子どもたちの状況を見ながら判断していく力を養い、計画通りに進まなくても臨

機応変に対応していくことの大切さを実践で伝える場面となった。

また、振り返りの一つの場面において、学生の意見が正反対であることがあった。皆が同じ保育で、同じ進め方になる必要はない。その場面が子どもにとってどのような意味をもっているのか、保育者の立場ではなく一番は子どもの目線で何がいいのか、保育者は、どのような対応をとることが適切であるのか、などといったことについて、学生がそれぞれ違う思いで参加し、他人の意見を聞くことで、いろいろな思いを吸収し合える環境が必要である。振り返りでは意図する方向に向かったものの、話が深められない場面も多くあり、今後はより活気あるディスカッションが課題である。

6　おわりに

これまで述べてきたように、アンケート結果、模擬保育の経過から視覚教材が子どもと保育者双方の動機づけを高めるために有効であることが確認された。また、保育者役の学生は、「このクラスはこういう傾向があるからこの活動をしたい」、「競争することが好きだからこういう遊びが盛り上がる」という子ども役の理解が出来てきた。立案の際にも、保育者役の学生が自分本位でなく、子ども役のために考えられるようになってきた。保育者は子どもの良き理解者でなければならない。子どもがやりたいこと、今まさに伸びようとしているところを読み取っていく力が保育者に備わっていないと上手くいかない。子どもを理解し、必要な援助をする。ただ活動をするのではなく子どもを理解した上で計画をし、実践する。また振り返り、次の保育へと繋げていく。子どもたちが輝いている姿を「また見たい」という保育者の気持ちから、保育者自身の内発的動機づけが高まり、次の活動へのモチベーションへと繋がっていくことは言うまでもない。このような保育者と子どもの相互作用によって、保育者の内発的動機づけと子どもの内発的動機づけが引き出される。模擬保育授業は、実際の子どもを目の前にしているのではなく、学生同士のやり取りであるため、実際の保育現場と異なる点があったり、学生同士の遠慮、やりにくい部分も多くあったであろう。しかし、学生が授業を通して感じたものを自分のものにして、将来保育の現場で多くの子どもたちがキラキラと輝き、子どもの内面を理解できる保育者になることを心から願う。

＜引用文献＞

文部科学省　2008　幼稚園教育要領解説. フレーベル館.

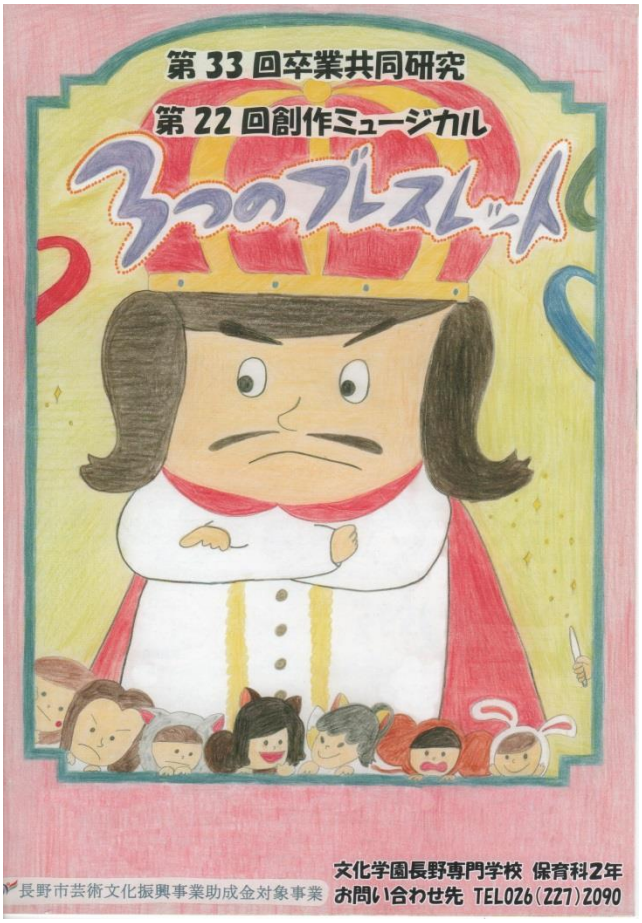
平成 26 年度創作ミュージカル「3 つのブレスレット」

石坂　由美子　　倉科　深陽

" The Three Bracelets "
An Original Musical Creation and Performance 2014

ISHIZAKA,　Yumiko　　KURASHINA,　Miharu

キーワード：オリジナル、手作り、ミュージカル、演劇、創作劇、
音楽劇、舞台、表現、ダンス、オペレッタ



１　はじめに

本校保育科学生による卒業共同研究創作ミュージカルは、長い歴史があり、先輩から後輩へ受け継がれてきた。創作ミュージカルは、脚本、音楽、振り付け、道具、衣装等はもちろん、計画、運営等創作活動に必要な事柄も学生が一から取り組んでいる。このことは、保育者を目指す学生にとって必要な技術面、内面の向上につながり貴重な経験となっている。

昨年度、平成 26 年 12 月 6 日(土)に発表が行われた平成 26 年度保育科卒業生 23 名による卒業共同研究創作ミュージカル「3 つのブレスレット」について報告したい。

２　卒業共同研究のねらい

（１）2 年間の学習の総まとめとして、脚本・音楽・ダンス・舞台装置などの創作活動を通して、総合的に表現力を高め、企画・推進力を身につける。

（２）成功に向けてお互いに励まし合い、助け合って学年全体で困難を乗り越え、達成感や充実感を味わうと共にコミュニケーション能力を高める。

（３）20 年来続いてきた保育科の卒業共同研究としてのミュージカルを継続し、地域・社会へ発信してきたことを大事にしていく。

３　係名とその役割分担について

はじめに、クラスから 3 名の総務係が推薦で選出され、総務係の進行により係決めを行う。自分の希望する係を第 1 から第 3 まで選び、総務係がまとめて割り当てていく。係が決定したら、係長を選出し、係長中心に活動計画を立て活動開始となる。なお、1 番始めの脚本は、クラスの有志が集まり脚本原案を作成し、後に決まった脚本係に引き継ぐ。

指導者は、総務係や係長中心に報告・連絡・相談を行い、係活動が円滑に進むよう指導する。また、練習計画を把握し、演技指導などを行う。

ここでは、係名とその仕事分担を記す。

○　責任者	全体把握、出欠確認、練習場・健康管理、その他
○　演出	練習内容企画、演出全般、全体指導（演技、台詞、歌詞）
○　副演出	活動費管理（支払・会計報告）、演出同様
○　合宿	合宿全般（合宿冊子作成・場所予約、連絡）
○　宣伝	マスコミ関係、チラシ配布計画、ポスター掲示計画
○　広報	ポスター・チラシ・パンフレット・アンケート等作成、ブログ管理、招待状・礼状
○　記録	写真、ビデオによる記録保存（撮影）、DVD 作成
○　脚本	脚本修正、製本
○　音楽・音響	作曲、効果音、歌指導、シンセサイザー演奏・操作・管理、MD 管理

○ 演技ダンス　振付・指導、演技・指導、ダンス・指導、ダンスレッスン計画・連絡
○ 基礎技術　発声練習、身体訓練計画・指導、表現力・指導
○ 大道具　舞台装置、大道具一切の材料調達・制作
○ 小道具　小道具一切の材料調達・制作
○ 照明　照明一切
○ 衣装メイク　衣装一切の材料・型紙調達、制作計画、顔メイク、髪メイク

４　係の組織図

責任者＊・演出＊・副演出＊は総務係（推進係）とし、活動計画の立案や進行、指導者との報告・連絡・相談を行う。組織は、総務係を中心とし、大まかに運営担当と技術担当にわかれる。

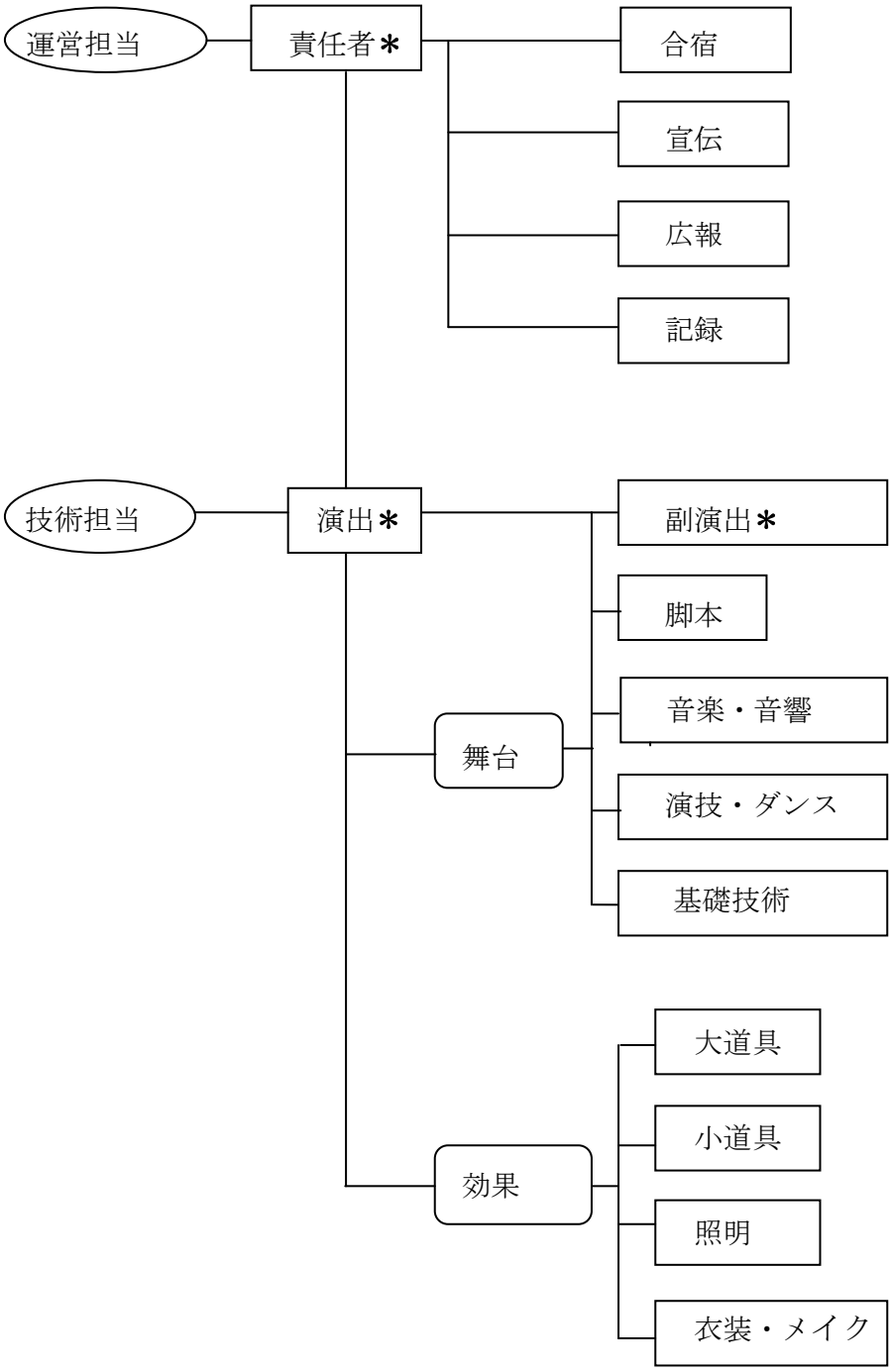


図１　係の組織図

5　各係の活動内容とその時期

ここでは、各係が実際に活動した時期と内容を記す。

①総務係（責任者・会計（副演出兼務））

表 1　総務係の活動内容（1 名）

年　月	活動内容
H25 年 10 月	係決めの進行・決定 長期活動計画作成
11 月	配役決めの進行・決定
12 月	共同研究予算案作成（会計） 1～3 月係活動計画作成
H26 年 1 月	春休みの活動計画　　各係活動の進行状況・内容把握
4 月	長野市芸術文化振興事業助成金申請 練習場（各教室）の確保・管理 ゴールデンウィークの活動計画・練習場の確保
5 月	中間発表会の進行 中期活動計画作成
6 月	元劇団四季岡本隆成氏に演技指導依頼
7 月	夏休みの活動計画・練習場の確保 元劇団四季岡本隆成氏と合宿打ち合わせ
8 月	合宿実施・総括 後期活動計画作成
10 月	短期活動計画作成 演技練習計画・演技指導依頼 発表会当日手伝い係の分担・依頼（保育科 1 年へ）
11 月	校内発表会の進行 校内発表会アンケート集計・反省 舞台会社との打ち合わせ ホクト文化ホールとの打ち合わせ
12 月	発表会前日・当日のタイムスケジュール配布 ホクト文化ホール楽屋などの管理 練習場・各教室整理整頓の確認、大道具解体計画
H27 年 1 月	卒業共同研究報告会・引き継ぎ会実施 会計報告（会計）

②総務係（演出・副演出）

表 2　総務係(演出)の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H25 年 12 月	発表会前日・当日のタイムスケジュール作成 年間活動計画作成 1～3 月までの係活動計画作成
H26 年 1 月	春休みの計画立案 脚本の読み深め
3 月	演技練習計画表作成
4 月	演技練習進行 ゴールデンウィーク演技練習計画
5 月	中間発表会の反省・演出修正
7 月	夏休みの活動計画作成 合宿練習計画作成 元劇団四季岡本隆成氏と合宿打ち合わせ（脚本送付）
8 月	合宿の反省・演出修正
9 月	10 月から本番までの演技計画作成
10 月	演技講師との打ち合わせ
11 月	衣装・メイクとの打ち合わせ 校内発表会の反省・演出修正 舞台会社との打ち合わせ ホクト文化ホールとの打ち合わせ
12 月	発表会前日・当日のタイムスケジュール配布 リハーサルの計画・進行 大道具解体の進行
H27 年 1 月	卒業共同研究報告会・引き継ぎ会実施

③合宿係（広報・宣伝係兼務）

表 3　合宿係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H26 年 5 月	合宿計画・宿泊施設との打ち合わせ 合宿レクリエーション計画
7 月	合宿しおり作成 合宿しおり配布・読み合わせ 宿泊施設と最終確認・合宿しおり郵送
8 月	合宿実施（開・閉会式司会、レクリエーション進行、施設管理指導） 合宿の反省 合宿終了後の礼状送付

④広報・宣伝係（合宿係兼務）

表 4　広報・宣伝の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H26 年 1 月	ミュージカルブログ・ツイッター作成準備（写真掲載承諾書の配布回収） 宣伝計画の立案　　ブログ・ツイッター更新
5 月	保育科ピアノ発表会取材依頼（電話・FAX） 取材時の応対、礼状送付 中間発表会招待状の作成・
8 月	ポスター・チラシ・チケット作成・完成 ポスター掲示・チラシ配布計画 文化祭での宣伝（パンフレットにチラシを挟む）
10 月	招待状作成
11 月	宣伝活動計画（幼稚園・保育園・公園・駅前等） 招待状・チケット配布の状況確認 パンフレット作成開始、原稿依頼・写真収集 印刷会社との打ち合わせ 校内発表会取材依頼（電話・FAX） 取材時の応対、礼状送付
12 月	本番当日の取材依頼（電話・FAX） 発表後、チケット半券の確認 発表後、ポスター・チラシの回収と確認 アンケート集計・まとめ 招待客への礼状送付

⑤記録係（照明係兼務）

表 5　記録係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H26 年 3 月	ビデオ撮影・写真撮影計画 機材操作マスター 各係活動日の確認、活動中の撮影・記録
4 月	係活動・演技練習風景の撮影・記録
5 月	中間発表会の撮影・記録
8 月	合宿練習風景、集合写真の撮影・記録
11 月	校内発表会の撮影・記録 パンフレット用の写真撮影 記念 DVD 作成について舞台会社と打ち合わせ 発表会当日の写真を依頼する写真会社、保育科 1 年生（記録係）との打ち合わせ
12 月	発表会当日の写真撮影進行指示 記念写真の発注 記念 DVD の制作 記録保存
H27 年 3 月	記念 DVD 完成・発注・管理

⑥脚本係（演出係兼務）

表 6　脚本係の活動内容（1 名）

年　月	活動内容
H25 年 8 月	「3 つのブレスレット」1 版発行　　脚本読み深め、修正
H26 年 2 月	「3 つのブレスレット」2 版発行
7 月	場面転換・大道具の把握 「3 つのブレスレット」3 版発行
8 月	合宿中の変更部分把握
9 月	「3 つのブレスレット」4 版発行
10 月	「3 つのブレスレット」5 版発行
11 月	「3 つのブレスレット」6 版発行 最終版発行(28 日)
12 月	発表会当日の舞台での台詞を最終脚本として打ち直す
H27 年 1 月	題字・楽譜などを揃え、脚本製本
2 月	脚本完成・配布

表 7　作詞№一覧

№	曲名	№	曲名
1	お城の中は仲良し －うまくいってない	11	魔法②
2	本当は?!	12	サラマンダーを倒す
3	魔法①	13	なぜ命令にそむく?!
4	自分がすべての王様①	14	サラマンダーとの戦い
5	みんな動物に	15	何故
6	妖精自己紹介	16	信頼①
7	ミッション	17	反省
8	精霊自己紹介	18	最後の戦い
9	自分がすべての王様②	19	信頼②
10	ウンディーネを倒す	20	信頼③

⑦音楽・音響係

表 8　音響係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H25 年 8 月	ミュージカル音楽の研究 シンセサイザー操作の研究
11 月	曲担当決め 作曲活動・同時に楽譜作成
H26 年 2 月	曲修正
5 月	出来上がった曲をシンセサイザーに録音
6 月	ダンス係と曲修正の打ち合わせ
9 月	シンセサイザーを使って曲のアレンジ 旋律部分を消し伴奏のみの音楽に作り替え CD 録音
11 月	長野舞台との打ち合わせ・ピンマイクの確認
12 月	本番用 CD 作り 音響操作の最終確認
H27 年 3 月	CD 完成・配布

表 9　作曲№一覧

№	曲名	№	曲名	№	曲名
1	開演 BGM	15	自分がすべての王様②	29	何故
2	妖精登場の BGM	16	ウンディーネを倒す	30	信頼①
3	お城の中仲良し - うまくいってない	17	ウンディーネとの戦い BGM	31	反省
4	本当は?!	18	城に戻る BGM	32	ノーム作戦 BGM
5	魔法①	19	王様はあてにしない	33	王様を思い出す BGM
6	お城の BGM	20	魔法②	34	最後の戦い
7	自分がすべての王様①	21	てんやわんや BGM②	35	ノームとの戦い BGM
8	てんやわんや BGM①	22	作戦 BGM	36	３つのブレスレット BGM
9	みんな動物に	23	サラマンダーを倒す	37	効果音（王様＋動物）
10	妖精自己紹介	24	水を運ぶ BGM	38	妖精登場 BGM②
11	ミッション	25	なぜ命令にそむく?!	39	信頼②
12	ウンディーネを倒す BGM	26	サラマンダーとの戦い BGM	40	パート紹介
13	精霊自己紹介	27	サラマンダーとの戦い	41	信頼③
14	お願い BGM	28	みじめな王様 BGM		

⑧演技・ダンス係（基礎技術係兼務）

表 10　演技・ダンス係の活動内容（3 名）

年　月	活動内容
H25 年 11 月	ダンスの研究 ダンス作り担当決め 音響係が作った曲に振り付けを考える・ダンス修正
H26 年 4 月	ダンス指導
5 月	中間発表の反省もとにダンス修正
6 月	道具・立ち位置の確認をしながらダンス修正
11 月	衣装係と「早着替え」について考える

表 11　ダンス振り付けNo.一覧

No.	ダンス名	No.	ダンス名
1	お城の中は仲良し －うまくいってない	11	王様はあてにしない
2	本当は?!	12	魔法②
3	魔法①	13	サラマンダーを倒す
4	自分がすべての王様①	14	なぜ命令にそむく?!
5	みんな動物に	15	サラマンダーとの戦い BGM
6	妖精自己紹介	16	サラマンダーとの戦い
7	ミッション	17	最後の戦い
8	精霊自己紹介	18	信頼②
9	自分がすべての王様②	19	エンディング
10	ウンディーネを倒す		

⑨基礎技術係（ダンス係兼務）

表 12　基礎技術係の活動内容（3 名）

年　月	活動内容
H26 年 1 月	動ける身体・踊れる身体・歌える身体づくりの研究 トレーニング、ストレッチ内容検討・発信
4 月	朝練習計画・進行
7 月	夏季休暇練習計画・実施
10 月	練習内容強化 ダンス係と連携し練習内容検討
11 月	歌唱力強化練習
12 月	発表当日本番前ウォームアップ進行

⑩大道具係

表 13　大道具係の活動内容（6 名）

年　月	活動内容
H26 年 1 月	ミュージカル大道具研究 原案考案 布パネルの準備
3 月	場面「森」の布パネルの布完成・下書き 布パネル色塗り開始
5 月	布パネル色塗り完成 長野舞台との打ち合わせ 場面「城」の「らせん階段」の採寸
6 月	「らせん階段手すり」ベニア板の購入、制作開始
7 月	長野舞台の指導を受けながら「らせん階段」補強
8 月	場面「海」の「岩」制作開始
9 月	場面「城」の「柱」布染め・板パネル色塗り
11 月	場面「海」の「岩」修正
12 月	道具完成 発表前日の荷造り・トラック積み込み作業 舞台装置の位置決め・最終チェック
H27 年 1 月	解体作業 倉庫整理

⑪小道具係

表 14　小道具係の活動内容（3 名）

年　月	活動内容
H25 年 10 月	ミュージカル小道具研究 小道具イメージ画作成・作成活動計画立案
H26 年 2 月	試作品制作
8 月	「やり」「ホース」制作・完成
9 月	「バケツ」制作・完成
10 月	「剣」「つえ」制作・完成 全小道具に色・ニスを塗り完成
11 月	「ブレスレット」制作・完成
12 月	発表前日・当日の最終チェック・補修
H27 年 1 月	発表後　解体作業・片付け

⑫照明係（記録係兼務）

表 15　照明係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H26 年 3 月	ミュージカル照明の研究 脚本の把握
4 月	活動風景記録・撮影
11 月	照明イメージ画制作 長野舞台との打ち合わせ
12 月	影絵用アルミ制作 照明イメージを知らせる リハーサルでの照明確認・打ち合わ・最終調整

⑬衣装・メイク

表 16　衣装・メイク係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H25 年 12 月	ミュージカル衣装・メイクの研究 衣装デザイン画完成
H26 年 3 月	布調達・確認・整理 採寸・型紙作り 「動物」パンツ完成
7 月	「妖精」「精霊」衣装作成
8 月	「王様」マント作成
10 月	「動物」被り物作成 「家来」「兵士」衣装作成 「王様」「付き人」衣装作成 髪型・メイク原案
11 月	試しメイク指導・修正 「早着替え」用に衣装修正 校内発表のアンケートより「妖精」「精霊」の露出部分修正
12 月	発表前日　メイク道具の確認・裁縫道具・衣装道具の確認 発表前　最終確認
H27 年 1 月	衣装の片付け メイク道具・裁縫道具の片付け・整理

６　ミュージカル配役・パートについて

卒業共同研究として取り組む内容であるため、保育科 2 年全員が係に配属し、また全員が役者になり舞台に上がるよう計画されている。ここでは、配役（表 17）とパート（表 18）について記す。配役は、クラス全員による投票によって決めている。

表 17　「3 つのブレスレット」役名一覧

№.	役名	№.	役名
1	王様、アリ	15	兵士、イヌ（エド）
2	付き人（キャナル）、ブタ	16	兵士、イヌ（ビーンズ）
3	付き人（ブルーム）、ブタ	17	兵士、イヌ（ジョン）
4	妖精（シルクモーリ）	18	兵士、リス（リンタ）
5	妖精（シルクナーレ）	19	兵士、リス（アケミ）
6	妖精（シルクターナ）	20	家来、ウサギ（ルーラ）
7	妖精（シルクマーラ）	21	家来、ウサギ（サリー）
8	精霊（ウンディーネ）（№.5 と二役）	22	家来、ウサギ（マリー）
9	精霊（サラマンダー）（№.6 と二役）	23	家来、ウサギ（マロン）
10	精霊（ノーム）（№.7 と二役）	24	家来、キツネ（ふゆ）
11	兵士、サル（きっぺい）	25	家来、キツネ（あき）
12	兵士、サル（さすけ）	26	家来、キツネ（はる）
13	兵士、サル（きすけ）		
14	兵士、サル（しょうきち）		

表 18　パート名一覧

パート名	役名
王様・付き人	王様 1 名・付き人 2 名
妖精・精霊	妖精 4 名・精霊 3 名（二役）
動物	動物 16 名（サル・イヌ・リス・ウサギ・キツネ）

7　創作ミュージカル「3 つのブレスレット」場面とあらすじ

ここでは、創作ミュージカル「3 つのブレスレット」のあらすじを、場面をおって紹介する。

第 1 場面＜森＞

森に住む妖精が、あるお城を覗きにやってきた。

シルクモーリとシルクナーレは、城の住人はみんな仲が良く、付き人も兵士も家来も立派な王様を中心に楽しく暮らしているという。しかし、しっかり者のシルクターナとシルクマーラは、二人が見てきた城の様子とは全く反対の様子であることを話す。王様は自分のことしか考えていない、兵士や家来は王様の思い通りに使われて不満を抱えて暮らしている、そしてお互いに干渉はせず王様に捨てられないようにしているという。

シルクモーリとシルクナーレは、人を思いやる心や人を信じることを知らない王様であることをシルクターナとシルクマーレに聞かされた。また、城の住人は、不満を抱えていても王様に逆らわず、王様との関係はもちろん、兵士と家来同士の関係も上辺だけで作られたものであることを知る。

王様に本当の優しさ、思いやる気持ちを持ってほしいと思った妖精は、王様も城の住人もみんなが幸せに暮らせるようにお城に魔法をかけた。

第 2 場面＜城＞

王様は、城のみんながどんなことを思って暮らしているのか全く興味を持たず、日々を過ごしていた。付き人も、王様の機嫌を損ねないよう、余計なことは言わずに言いつけ通りに働いていた。しかし、自分のことしか考えない、自分の欲望のためなら兵士や家来を犠牲にする王様に嫌気を持ち始めていた。

そんな城に魔法がかけられた。聞いたことのない音が城中に流れたと同時に兵士や家来が、サルやイヌ、リス、ウサギ、キツネの姿になってしまったのだ。動物の姿になった兵士と家来は、どうして動物になってしまったのか全くわからないまま王様の目の前に現れた。王様は、動物になった兵士・家来を心配もせず、役にも立たない兵士や家来は必要ない、新しい兵士や家来を探してくるよう付き人に申し付けた。

動物の姿になり動揺している兵士と家来の前に、妖精が現れた。魔法をかけて動物の姿にしたのは自分たちであることを話した。人間に戻りたい兵士と家来は、魔法を解く方法を必死に聞き出し、妖精が与えたミッションを成功させることで魔法が解けることが分かった。

ミッションは 3 つあり、ミッションを成功する度にブレスレットを手に入れることができる。3 つのブレスレットが揃った時、姿を元に戻すことも、永遠の命を持つことも、どんな願いも叶うという。しかし、ブレスレットの願いはひとつだけ。

3 つのブレスレットは同じ場所に存在しないこと、それは 3 人の精霊が持っていることを知る。3 人の精霊とは、①水の精霊ウンディーネ、②火の精霊サラマンダー、③大地の精霊ノームだ。3 人の精霊からブレスレットを手に入れようと、動物の姿になった兵士と家来は、王様に指示を仰いだ。しかし、動物になった兵士と家来を助けたいと思う気持ちなど持っていない王様は、指示を待つ兵士と家来が騒ぎ立てることが面倒で、精霊たちを探してブレスレットを手に入れるようにと指示しただけで、方法は丸投げし、任せると言い放った。動物になった兵士と家来は、自分には呪いがかかっていないためにいい加減な王様の態度は気にせず、早く人間の姿に戻りたいと、動物の特徴を生かして精霊を探そうと団結していった。

耳の長いウサギに変えられた家来が、遠くから聞こえる精霊の声を聞き、鼻の利くイヌに変えられた兵士は、精霊の匂いを感じ取り、精霊に会うことが出来た。精霊にブレスレットをもらえないかと頼んだが、やはりすぐにもらうことは出来なかった。本当に必要だと思うのなら自分達の力で手にいれるよう伝えた精霊は、兵士と家来の前から姿を消した。

城に戻り、精霊と会ったことを王様に報告すると、王様は精霊と戦う気持ちになった。そして、精霊について調べていた家来が水の精霊ウンディーネの弱点が分かったと王様に報告した。ここまできたら、城のみんなで精霊に立ち向かおうと兵士が王様と付き人に協力を求めた。しかし、王様は動物に変えられたのは兵士と家来。自分達で戦ってくるべきだと兵士と家来の必死の願いを聞こうともしない。それなら付き人に力を貸して

欲しいと申し込んだが、王様は付き人が戦いに行ってしまえば自分の身の回りの世話をする者がいなくなるから許可はしないと言い放ち、早くウンディーネを倒してくるよう命じた。

兵士は戦いに行き、家来は城の中で待っていることになった。

第 3 場面＜海＞

兵士は、ウンディーネの居場所を探し、みんなでブレスレットを手に入れようとウンディーネが住む海に向かった。ウンディーネの弱点「男性に弱い」ことも調べ、ウンディーネはすぐに見つかった。しかし、水ばかりで手も足も出ずに困っていた。そこへ、城の仲間が苦しんでいるのに放っておけないと付き人が海に駆け付けた。王様には見つからないように、王様が昼寝をしている最中に城を抜け出して来たと言う。時間のない付き人にウンディーネの弱点を伝え、その様子を陸から見守ることにした。付き人はウンディーネを陸に呼び寄せようと、美貌を褒めまくってみた。付き人の褒め言葉に喜んだウンディーネは陸に上がってきたが、褒め言葉を並べているだけと気づき、付き人に怒り出した。作戦失敗かと思ったその時、もう一人の付き人が自分が何とかしようとウンディーネにプロポーズをした。プロポーズにうっとりしたウンディーネは、差し出された花と引き換えに思わずブレスレットを付き人に渡してしまった。我に返ったウンディーネは、大切なブレスレットを渡してしまったと悔やみながら海へと帰って行った。

一つ目のブレスレットを手に入れた兵士は、付き人に感謝し、残りの 2 つのブレスレットもすぐに手に入るだろうと喜んでいた。そして、非常事態である時に悠々と昼寝をしている王様に対して「酷すぎる、もう信用しない。」と一致団結し、ウンディーネからブレスレットを手に入れ、ミッションを成功させた。その様子を見ていた妖精は、次の魔法を城にかけることにした。

第 4 場面＜城＞

兵士が城に無事に戻ってきた上、欲しかったブレスレットまで持ち帰ってきたことに家来は喜んだ。付き人は、自分達が戦いに行ったことは言わずに、兵士がウンディーネを倒したと王様に報告した。

すると、また聞いたことのない音が城中に流れ始め、今度は、付き人がブタの姿になり、王様までアリの姿に変えられてしまったのである。王様は哺乳類より下等なアリの姿に変えられたことに衝撃を受けた。慌てた王様は、アリの姿のまま次の作戦を立てるように兵士や家来、付き人に命令を出したが、兵士と家来は、自分のこととなると必死になる王様を見て呆れていた。

次に倒す精霊はサラマンダー。火の精霊なのだから水に弱いだろうと、持てるだけの水を持って、今度は家来達も一緒に戦いに行くことになった。火の精霊サラマンダーは強いという噂があるが、ブレスレットを手に入れて絶対に人間の姿に戻りたいとみんなで水を運んだ。動物の姿になり思うように体を動かせられないけれど、みんなが頑張っているのだと、誰一人休もうとする者はいなかった。

アリに変えられた王様とブタに変えられた付き人が、兵士と家来の後を追いかけた。しかしアリの声は届かず、兵士も家来も先に行ってしまった。どうして立ち止まらないのか、命令が聞けないのかと怒鳴った王様。付き人は、王様は自分のことしか考えない方だから、兵士や家来も王様の命令も聞かなくなったことを伝えた。王様は、いつも国のことを考え、国を大切にしてきたのに何故そんなことを言うのか全く分からないと強気で言う。いつも王様の側で見守ってきた付き人は、王様には優しい心を知って欲しい、兵士や家来を信じて欲しいと、今まで言えなかった思いを打ち明け、兵士と家来のもとに急いだ。付き人の思いを受け止めた王様は一人で城に帰ることにした。

第 5 場面＜森＞

サラマンダーの住む森にたどり着いた兵士と家来、付き人は、激しく燃える炎に水を集中させようとみんなで力を合わせた。サラマンダーは強力な炎を放つため、サルに変えられた末っ子の兵士は怯えていた。しかし、みんなで水を集中させている兄弟の姿や他の城の仲間の姿を見て、いつも守られているばかりの自分だが、今は自分の力も精一杯出すのだと奮起し、戦いに挑む。

強力な炎に立ち向かえないかも・・・と弱気になった時、人間に戻りたい気持ちはみんな一緒！力はなくともみんなで立ち向かえばきっと勝てる！と再び気持ちを盛り上げ、サラマンダーに水を集中させた。

見事にサラマンダーの炎が消え、二つ目のブレスレットを手に入れた。ミッションを成功させ、みんなで力を合わせれば何も怖くない、どんなことも乗り越えられるのだと感じることができた。

残るは三つ目のブレスレットを手に入れること。ノームを倒す作戦会議を開くため城に戻ろうとしていた時、アリの姿の王様が現れた。兵士や家来は、王様は城で休んでいて下さいと言った。王様は、「どうして自分をおいて戦いに行くのか、私の知らない優しさとは何なのか。」と聞いた。アリの姿になった王様は小さく、弱々しく見えた兵士が「王様はいつも自分が一番で、僕達のことはただの兵士としてしか思っていなかったではありませんか。」と言った。更に付き人は、「高慢な王様に、優しさ、思いやりを知って欲しかった。」

と付け加えた。今まで兵士や家来、付き人にこんなことを言われたことなどなかった王様は、一人考えることにした。暗い森で一人になる王様のことを心配した兵士や家来、付き人だったが、王様に早く城に戻るよう命じられ、森を後にした。

暗い森の中、王様は一人でなぜこうなってしまったのか考えた。良い国を作りたかっただけなのに、城のみんなの心が離れていき、誰もついてきてくれなくなってしまったのは何故なんだろう。誰かに教えてもらいたいと声を上げた時、人と心を通わせるためにはどうしたらいいいか教えましょうと妖精が現れた。「自分が辛くても人が悩んでいたら声をかけよう。自分が苦しくても人が困っていたら手を差し伸べよう。それが人との絆を作り、仲間の信頼になる。」（今年度ミュージカルのテーマ）王様はじっと聞いた。そして、どうしてアリの姿になったのか、アリは子孫を残すためにすすんで女王の餌になるアリもいるということ、自分を犠牲にしても、苦しくても辛くても人のために手を差し伸べることのできる心を持って欲しいと伝え、妖精は姿を消した。

王様は考えた。苦しくても人のために何て今まで考えたこともなかったが、兵士や家来はそうだった。自分が辛くても仲間のために戦っている兵士や家来のことを思い、今まで一体何をしていたのだろうと反省したのだった。

第 6 場面＜城＞

最後の精霊ノームとの戦いに備え、兵士と家来、付き人は体を休めていた。翌日になり、ノームとの戦いの作戦は思いつかなかったが、みんなで団結し、持てる力を結集して発揮させれば戦えると信じてノームの住む森へ行こうとしていた。すると、ノームとの戦いが始まっていることを知る。城の仲間はみんな城にいるのに、一体誰がノームと戦っているのだろうと不思議に思いながら森へと急いだ。

第 7 場面＜森＞

森に駆けつけると、ノームが魔法をかけて相手に攻撃を仕掛けている最中だった。その相手は、何と王様だったのだ。王様はノームの魔法によって地面に叩き付けられ身がぼろぼろになっていた。兵士や家来が、王様は一人でどうして戦っているのだろうかとその戦いを見ていると、倒れては起き上がり、またノームに立ち向かうアリの姿の王様がいた。こんな王様は見たことがない、一緒に戦おうとノームに近付こうとしたその瞬間、王様がノームの武器によってやられてしまい倒れてしまった。

倒れた王様に、みんなが駆け寄り声をかけると、「本当にすまなかった。私は・・・」と言葉途中に目を閉じてしまった。目を閉じたままの王様に、兵士や家来、付き人がどうしてひとりで戦ったのかと悔やみ、謝ってもすまないけれど王様にごめんなさいと涙をこぼした。

しばらくして、ノームがいなくなっていることに気付いた。ノームを探していると、緑色のブレスレットが落ちていた。これで三つ目のブレスレットが揃った。やっと人間の姿に戻れる。すると、一人の家来がブレスレットが揃ったのだからどんな願いも叶う、だったら王様の命を救ってもらわないかとみんなに問いかけた。ブレスレットの願いは一つだけしか叶わない、自分達は動物の姿のままであること、どうしたら良いのか考えた兵士、家来、付き人。姿は動物であるけれど、命はある。でも、王様は自分達のためにノームと戦い、命を落としてしまった。やっぱり王様の命のためにブレスレットの願いを使おうとみんなが思った。

3 つのブレスレットを重ね合わせた時、その願いは叶う。「王様の命を救ってください。」すると、王様は息を吹き返し、それだけではなくアリの姿から人間の姿に戻っていたのだ。大喜びをする兵士、家来、付き人。王様は自分のためにブレスレットの願いをつかってくれたことを知り、深く感謝した。そして、今までの自分を反省し、動物のままの兵士や家来、付き人でも構わない、大事な者たちだとみんなを抱きしめた。

王様の心、兵士や家来、付き人の心に触れた妖精は、最後にもう一つ魔法をかけた。「ルマニア、ルマニア、ルマニーア。」みんなの姿が人間に戻ったのだ。王様と兵士、家来、付き人はみんなが元通りになり喜んだ。

妖精は人間が幸せに暮らせるためにいろいろな魔法をかけて存在している。今回の魔法も妖精のしたことだとみんなは知ることになった。妖精は、城が幸せに満ちたことを見届け、これからも見守り続ける。

そして、王様はこれからはみんなで協力して今までよりずっといい国、良い城にしていこうと決意し、城のみんなも王様の側で力添えをしていくことを誓った。

8　創作ミュージカル公演後のアンケート実施と結果

当日の発表には、一般の方が 780 人来場し、創作ミュージカルを観覧した。

学生が作成し当日受付で渡したパンフレットにアンケート用紙を挟み、感想等を記入してもらった。公演終了後にそのアンケート用紙を会場出口で回収し、後日、アンケート結果をまとめた。

配布したアンケート用紙は資料 1 の通りである。以下にアンケートの集計結果を記す。

アンケート結果

アンケート回答者数：704 名

1　本日の創作ミュージカル「3 つのブレスレット」をご覧になった感想はいかがでしたか

①大変楽しかった　239　　②楽しかった　103

③まあまあ楽しかった　12　　④楽しくなかった　1

2　本日の創作ミュージカル「3 つのブレスレット」は何でお知りになりましたか

①幼稚園・保育園・学校　34　②学生・職員から　161　③知人・友人から　111

④マスコミ　20　⑤ちらし・ポスター　82

⑥昨年またはそれ以前の創作ミュージカルを見て　35

3　本日の創作ミュージカル「3 つのブレスレット」の中でよかったと思うところはどこですか

①演出　165　　②脚本 158　　③作曲　153　　④歌唱　210

⑤ダンス　167　　⑥演技　148　　⑦音響　112　　⑧照明　124

⑨衣装　225　　⑩メイク　68　　⑪舞台装置　79　⑫小道具　81

＜多数の意見を抜粋＞

○　演出・脚本に関する意見

・「信頼」「絆」のテーマがよかった

・明快で、小さな子にも分かりやすい内容だった

・王様の改心の場面がよかった

・人とつながることが希薄になりつつある時代に、大切なことがテーマになっていた

○　作詞・作曲・音響に関する意見

・伝えたい内容が曲で伝わってきた

・メインテーマ曲がすてきだった

・歌の掛け合いがよかった

○　歌唱に関する意見
・少人数だったが、歌がよく聞こえた
・ソロで歌う場面が多かったが、声が出て堂々としていた
・心を込めて歌っていたメインテーマがよかった

○　ダンスに関する意見
・役に合ったダンスでよかった

○　照明に関する意見
・回る照明がきれいだった
・幕に映った照明がきれいだった

○　メイク・衣装に関する意見
・役に合ったメイク・衣装が細部まで凝っていてよかった
・精霊役の衣装が華やかでよかった
・早着替えの工夫がよかった
・動物の特徴が出た衣装で分かりやすかった

○　舞台装置に関する意見
・大道具の布パネルが良く描けていた

○　小道具に関する意見
・子ども達が喜びそうなアイテム（ブレスレット）でよかった

など

４　改善したほうがよいと思うところはどこですか

①演出　7	②脚本　10	③作曲　9	④歌唱　23
⑤ダンス　26	⑥演技　27	⑦音響　9	⑧照明　5
⑨衣装　7	⑩メイク　9	⑪舞台装置　5	⑫小道具　6

○　多数の意見を抜粋
・セリフが聞こえにくい時があった
・ダンスや歌をそろえるといい
・幼児には少し長かった

５　印象に残っている点、その他感想などございましたらご記入ください

○　意見を抜粋

・一生懸命な姿から努力が伺えて感動した

・この学校に入学してミュージカルをやりたい

・孫がいい教育を受け感謝

など

９　発表までのエピソード

卒業共同研究の活動が始まる前には、例年保育科２年から保育科１年の学生に向けて「卒業共同研究報告会」と呼ぶ活動の報告と各係の引き継ぎがある。そこでは、2 年生が卒業共同研究の活動の経緯や活動を通して学んできたこと、今後更に研究を深めていきたいことなどを報告する。これから活動を進めていく 1 年生にとって 2 年生の経験が自身の活動の参考になる。

1 年次に卒業共同研究報告会に参加し、また先輩の活動を見てきた今年度学生は、活動計画をしっかりと立案することの重要性を感じ、計画通りに進めていこうと意気込んでいた。総務係はまず、ホクト文化ホールでの発表までを見据えた長期計画を立案し、先輩達のように活動に遅れはとらないのだと、クラス全体に係活動が進むよう声をかけてきた。クラス全体が総務の意気込みに合わせて活動が活発になっていくことを期待した反面、見栄え重視・発表会のためだけの活動にならないよう、活動の中で自分を見つめ直したり、仲間との心のつながりを深めていくことも大事にしながら活動出来るよう様子を見守ってきた。

1 年次の春休みには、出来上がった脚本に合わせ、道具作りや作曲、振り付けを考えた。主に大道具・音響・ダンス係が春休みを利用し活動を始めた。

総務係である副演出の学生は、全体にてきぱきと指示を出し、その指示によってクラス全体の活動が進むことが多かった。総務には責任者と演出がいるが、指導者と活動計画の相談をし、活動計画を立ててくるのもこの副演出である学生で、音響係やダンス係が春休みに活動をすると、その場にいては仲間から相談も受けていた。また、社交的な面を持っていることもあり、日頃から彼女を頼る学生も多かったため、全体に指示を出すことも増えていった。

その様子に焦りを感じた責任者が、計画通りに各係で活動を進めていくよう指示を出し始めた。しかし、言葉のみの指示は仲間に伝わることはなく、逆に「何もしていないのに、指示だけ出して…。」と反感を持たれてしまい、責任者は副演出の彼女のようにはできない、自分が責任者ではなく副演出の彼女が責任者になればいいのではないかと悩み、指導者に話すようになった。自分の弱さを見せることが苦手だった責任者が、そんな悩みを話すことができるようになったことをきっかけに、責任者として何をすべきなのか考えられるよう促すようにした。

責任者の仕事は、道具を作るような目に見えるものではなく、全体を推進していくことが主になるため、責任者は何もしていないと思われてしまうことがある。責任者として、クラスの仲間がどんなことに悩みつまずいているのか、また、どんな思いを持っているのかを知った上で、励まし、支えていくことが、より良い活動に結び付けるために必要なことである。責任者だからと前に立って声を張り上げることだけがリーダーではない。

このことに気付くことが出来るよう、指導者は責任者に、活動の進み具合はどうか尋ねてみた。すると、「やっていたと思います。」また「やるように伝えます。」と返事が返ってきた。春休みを使って仲間が努力していることや、どんなことにつまずいているのか知ることで、指示の仕方も変わってくるのではないかと彼女に問いかけた。副演出は、仲間が活動している様子を見ているからこそ、困った時に具体的なアドバイスができたり、一緒に悩むことができ、その積み重ねがあって、副演出の指示は仲間の心に響くのだということを、責任者と話をすることができた。

責任者は、自分は言葉だけの指示が多いため、仲間の心に響いていかないということ、また係活動の様子を見に行くことがなかったことも仲間と通じ合わない原因だということを感じることが出来た。それから責任者は、各係の活動日を把握し、活動が終わるまで同じ校舎に残り活動の様子を見守るようになった。副演出は各係の活動の中心になり活動を進めていたが、責任者は各係の活動を見守り、終わった後は労いの言葉をかけること、また、副演出の指示に対してはサポート役になることを心掛けてきたため、お互いの良さを活かした総務係になろうという気持ちが伺えるようになってきた。

そんな中、夏休みの合宿で、元劇団四季の俳優である岡本隆生氏の演技・ダンス指導を受けることが決まった。劇団四季で活躍された岡本氏の指導を受ける合宿に向けて学生の気持ちが一気に高まり、練習にも力が入った。そして、憧れの劇団四季の方に指導を受けたことで、自信や意欲も感じられた。

夏合宿を終え、秋になると本格的な演技練習が始まり、ダンス係がこのミュージカル一番の見せ場であるサラマンダーVS 動物の場面でのダンス作りに苦戦していた。ダンス係の係長は、仲間に自分の思いをどのように伝え、ダンス指導をしたら良いのか悩み、ダンスの構成がなかなか進まなかった。しかし、ダンスが出来上がらないと練習にならないため、どんなダンスが場面にあっているのだろうかと真剣に考えた。今持っている力だけで考えたダンスを指導してみたが、振りのみを意識したダンスになってしまい、何かが違うと思い始めた。更にダンスの研究をし、ダンスをする人も楽しんでできるようにしたいと前向きに活動を始めた。

ダンスで感情を表現し伝えることと、20 名程の大勢の学生のダンスを検討していくことは難しかった。そこでダンス係の係長は、何度も劇団四季の DVD を見てダンスの研究を重ねたり、表現担当の指導者に相談したりしながらダンスを検討し、クラス全体にダンス指導を繰り返し行った。また自宅が遠く通学まで時間がかかるにもかかわらず、朝や帰り、休み時間には DVD を繰り返し見たり、ノートに振りや隊形などを記載したりしては研究し

ていた。その姿を、クラスの仲間も見ていたのだろう。係長が指導するダンスにアイディアを重ね、何度も練習をし、サラマンダーVS 動物のダンスを完成させた。完成したその時、ダンスが出来上がったので見てほしいと指導者を呼びに来た。興奮していた学生は、もう一度振りの確認をし、ダンスを披露してくれた。最後まで出来上がったダンスは場面に合っていて、何よりも学生の気持ちが一つになっていることを感じ、指導者は拍手をした。その瞬間、ダンスをしていた学生と係長は抱き合って喜び、係長と副演出は涙を流していた。その中には先に述べた責任者の姿もあった。また、ダンス完成の瞬間を、場面に出てこない学生がダンスの輪の外からビデオ撮影する姿も見られた。

昨年度の保育科 2 年生は、自己主張ができる学生が多く、アイディアを出しながら自分達のミュージカルを作り上げようと活発な雰囲気が特徴だった。それが彼女たちの良さであった。一方で、いろいろなアイディアが出てきた時に、強い主張ができる学生の意見がすぐに通り、良い作品作りのためにじっくり時間をかけて検討するというような面倒なことは避けようとする雰囲気が全体的にあった。今まで面倒なことを避けようとしてきた学生が、この活動を通し、一つの目標に向かって仲間のために努力し、作り上げる喜びを仲間と共感して得た力は、相手の気持ちに寄り添い、思いやりを持った振る舞いにつながると信じている。

10　創作ミュージカルを終えて

保育現場では、子ども達のより良い発達のために、子ども達の心に寄り添い、理解すること、また、保育者が努力することは当然なことになる。そして、子ども達のために努力を惜しまず、力を注げることこそが、温かい保育につながり、そのためには、保育技術はもちろん、保育者として必要な資質が求められる。子ども達の心を育てていく保育者自身が、心豊かな人であって欲しいと筆者は願っている。

この卒業共同研究創作ミュージカルの活動は長期間に亘り、活動を通して自分の良さや弱さに直面し、また仲間との関係の中で喜びや楽しさだけではない気持ちも味わう。仲間と一緒だからできたこと、自分と仲間の力を信じたからできたこと、そして、表に立って目立つことだけがリーダー、若しくは指導者ではないことを実感できたことは、学生自身が保育者となり、子ども達を指導していく立場になった時にその力が必ず活かされると思う。

資料 1

創作ミュージカル「３つのブレスレット」アンケート

本日は、創作ミュージカル「3 つのブレスレット」にご来場いただき、誠にありがとうございました。

文化学園長野専門学校の保育科では、皆様からのご意見をお伺いし、来年度以降もより良い共同研究を目指して励んでまいりたいと思っております。

つきましては、以下のアンケートにご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

1　本日のミュージカル「３つのブレスレット」をご覧になった感想はいかがですか。

①大変楽しかった　②楽しかった　③まあまあ楽しかった
④楽しくなかった　⑤その他（　　）

2　本日のミュージカル「３つのブレスレット」は何でお知りになりましたか。

①幼稚園・保育園・学校　②学生・職員から　③知人・友人から
④マスコミ（長野市民新聞・週刊長野・信濃毎日新聞）
⑤ちらし・ポスターで　⑥昨年またはそれ以前の創作ミュージカルを見て
⑦その他（　　）

3　本日の創作ミュージカル「３つのブレスレット」の中でよかったところはどこですか。

[複数回答可]

①演出　②脚本　③作曲　④歌唱　⑤ダンス　⑥演技
⑦音響　⑧照明　⑨衣装　⑩メイク　⑪舞台装置　⑫小道具
⑬その他（　　）
★よろしければ、具体的な内容をご記入ください。

4　また、改善したほうが良いと思うところはどこですか。[複数回答可]

①演出　②脚本　③作曲　④歌唱　⑤ダンス　⑥演技
⑦音響　⑧照明　⑨衣装　⑩メイク　⑪舞台装置　⑫小道具
⑬その他（　　）

５　印象に残っている点、その他の感想などございましたらご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

当アンケートは、ロビーにございます回収箱にお入れくださいますよう、お願い申し上げます。

また、下の住所に送っていただけたら幸いです。

〒380-0915　　長野市上千田 141

文化学園長野専門学校　保育科　卒業共同研究係

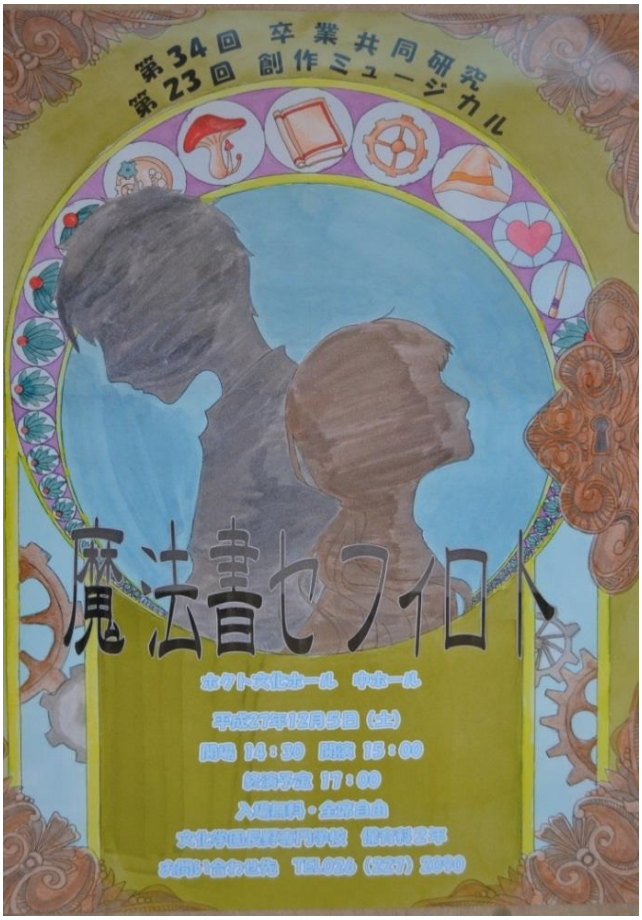
平成 27 年度創作ミュージカル「魔法書セフィロト」

石坂　由美子

" The Book of Magic：Sephirot "
An Original Musical Creation and Performance 2015

ISHIZAKA,　Yumiko

キーワード：オリジナル、手作り、ミュージカル、
音楽劇、舞台、表現、ダンス



1　はじめに

本校保育科学生による卒業共同研究創作ミュージカルは、長い歴史があり、先輩から後輩へ受け継がれてきた。創作ミュージカルは、脚本、音楽、振り付け、道具、衣装等はもちろん、計画、運営等創作活動に必要な事柄も学生が一から取り組んでいる。このことは、保育者を目指す学生にとって必要な技術面、内面の向上につながり貴重な経験となっている。

今年度、平成 27 年 12 月 5 日(土)に発表が行われた平成 27 年度保育科卒業生 20 名による卒業共同研究創作ミュージカル「魔法書セフィロト」について報告したい。

2　卒業共同研究のねらい

（1）2 年間の学習の総まとめとして、脚本・音楽・ダンス・舞台装置などの創作活動を通して、総合的に表現力を高め、企画・推進力を身につける。

（2）成功に向けてお互いに励まし合い、助け合って学年全体で困難を乗り越え、達成感や充実感を味わうと共にコミュニケーション能力を高める。

（3）20 年来続いてきた保育科の卒業共同研究としてのミュージカルを継続し、地域・社会へ発信してきたことを大事にしていく。

3　係名とその役割分担について

はじめに、クラスから 3 名の総務係が推薦で選出され、総務係の進行により各係決めを行う。自分の希望する係を第 1 から第 3 まで選び、総務係がまとめて割り当てていく。係が決定したら、係長を選出し、係長中心に活動計画を立て活動開始となる。なお、1 番始めの脚本は、クラスの有志が集まり脚本原案を作成し、後に決まった脚本係に引き継ぐ。

指導者は、総務係や係長中心に報告・連絡・相談を行い、係活動が円滑に進むよう指導する。また、練習計画を把握し、演技指導などを行う。

ここでは、係名とその仕事分担を記す。

○　責任者	全体把握、出欠確認、練習場・健康管理、その他
○　副責任者	活動費管理（支払・会計報告）、責任者同様
○　演出	練習内容企画、演出全般、全体指導（演技、台詞、歌詞）
○　合宿	合宿全般（合宿冊子作成・場所予約、連絡）
○　宣伝	マスコミ関係、チラシ配布計画、ポスター掲示計画
○　広報	ポスター・チラシ・パンフレット・アンケート等作成、ブログ管理、招待状・礼状
○　記録	写真、ビデオによる記録保存（撮影）、DVD 作成
○　脚本	脚本製本

○　音楽・音響　　作曲、効果音、歌指導、キーボード演奏・操作・管理、MD 管理
○　演技ダンス　　振付・指導、演技・指導、ダンス・指導、ダンスレッスン計画・連絡
○　基礎技術　　発声練習、身体訓練計画・指導、表現力・指導
○　大道具　　舞台装置、大道具一切の材料調達・制作
○　小道具　　小道具一切の材料調達・制作
○　照明　　照明一切
○　衣装メイク　　衣装一切の材料・型紙調達、制作計画、顔メイク、髪メイク

４　係の組織図

責任者＊・副責任者(会計＊)・演出＊は総務係（推進係）とし、活動計画の立案や進行、指導者との報告・連絡・相談を行う。組織は、総務係を中心とし、大まかに運営担当と技術担当にわかれる。

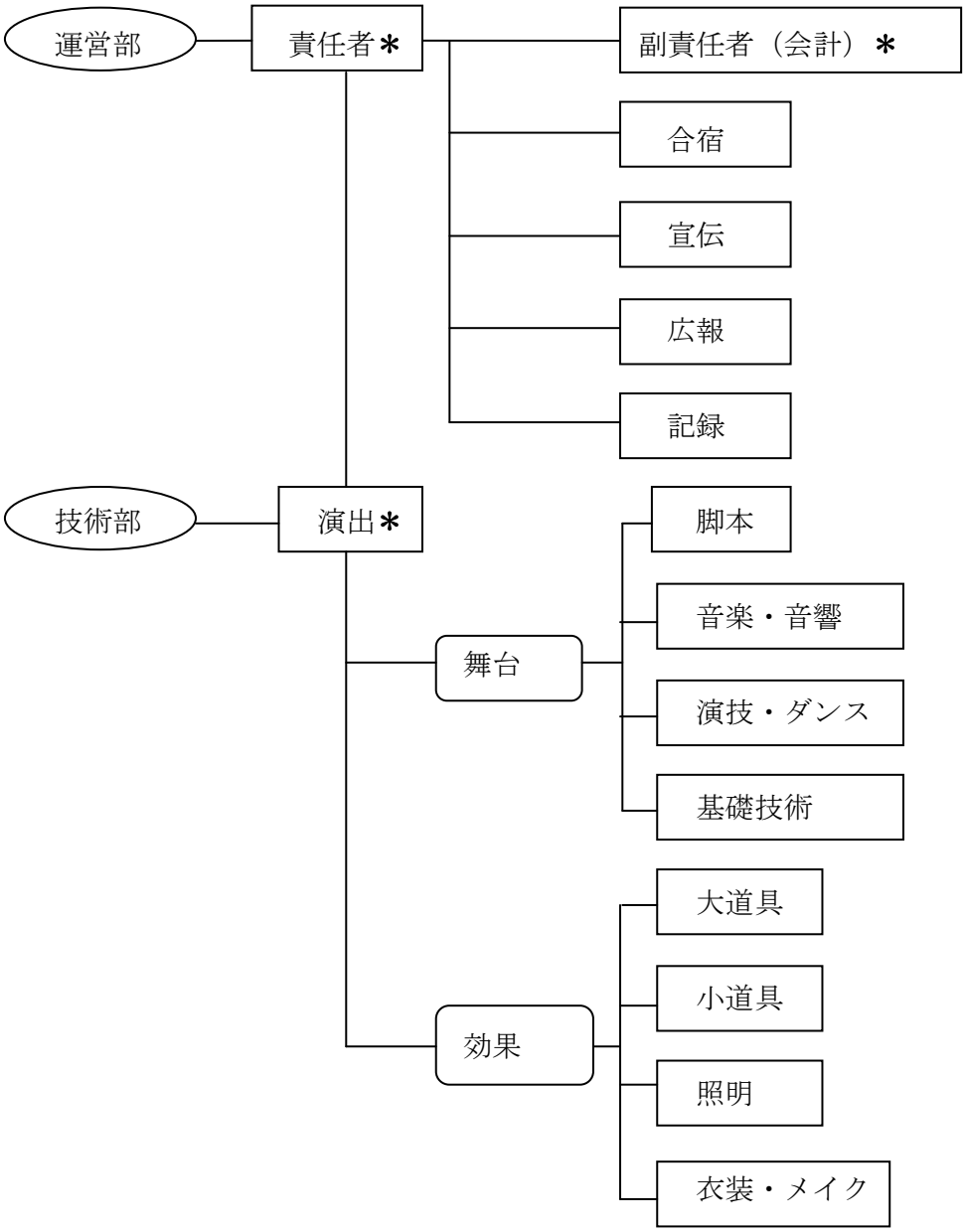


図１　係の組織図

５　各係の活動内容とその時期

ここでは、各係が実際に活動した時期と内容を記す。

①総務係（責任者・副責任者会計）

表１　総務係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H26 年 10 月	係決めの進行・決定
12 月	共同研究の進め方について話し合い
H27 年　1 月	共同研究予算案作成（副責任者会計） 春休みの活動計画 配役決めの進行・決定 各係活動の進行状況・内容把握
4 月	長野市芸術文化振興事業助成金申請 長野市施設利用の変更手続き 練習場（各教室）の確保・管理 ゴールデンウィークの活動計画・練習場の確保
5 月	共同研究予算を各係見直し（副責任者会計） 中間発表会の進行
7 月	夏休みの活動計画・練習場の確保
8 月	合宿実施・総括
9 月	10 月から本番の活動計画
10 月	演技練習計画・演技指導依頼 朝、放課後練習の計画
11 月	校内発表会の進行 校内発表会アンケート集計・反省 舞台会社との打ち合わせ ホクト文化ホールとの打ち合わせ 発表会当日手伝い係の分担・依頼（保育科 1 年）
12 月	発表会前日・当日のタイムスケジュール配布 ホクト文化ホール楽屋などの管理 練習場・各教室整理整頓の確認、大道具解体計画
H28 年　1 月	卒業共同研究報告会・引き継ぎ会実施
3 月	会計報告（副責任者会計）

②総務係（演出）

表 2　総務係(演出)の活動内容（1 名）

年　月	活動内容
H27 年　1 月	春休みの計画立案 1 版脚本配布 舞台装置図案（布パネル）作成
3 月	演技練習計画表作成
4 月	脚本の読み深め 演技練習進行 ラインテープ貼り ゴールデンウィーク演技練習計画
5 月	中間発表会の反省・演出修正
7 月	夏休みの活動計画作成 合宿練習計画作成
8 月	2 版脚本配布 合宿の反省・演出修正
9 月	10 月から本番までの計画表作成 舞台装置図案（板パネル）作成 3 版脚本配布
10 月	脚本練り直し 演技講師との打ち合わせ
11 月	衣装・メイクとの打ち合わせ 校内発表会の反省・演出修正 4 版脚本配布 舞台会社との打ち合わせ ホクト文化ホールとの打ち合わせ
12 月	最終版脚本配布 発表会前日・当日のタイムスケジュール配布 リハーサルの計画・進行 大道具解体の進行
H28 年 1 月	卒業共同研究報告会・引き継ぎ会実施

③合宿係（広報・宣伝係兼務）

表 3　合宿係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H27 年 7 月	合宿計画・宿泊施設との打ち合わせ 合宿しおり作成 宿泊施設と最終確認・合宿しおり郵送
8 月	合宿実施（開・閉会式司会、レクリエーション進行、施設管理指導） 合宿の反省 合宿終了後の礼状送付

④広報・宣伝係（合宿係兼務）

表 4　広報・宣伝の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H27 年　1 月	ミュージカルブログ・ツイッター作成準備（写真掲載承諾書の配布・回収）
5 月	中間発表会招待状の作成・
8 月	文化祭での宣伝（一般の方にチラシ渡し）
9 月	印刷会社の決定・打ち合わせ
10 月	招待状・チケット作成 ポスター最終確認・印刷依頼 ポスター完成・ポスター掲示計画
11 月	チケット・チラシ完成・配布計画 招待状・チケット配布の状況確認 リーフレット作成開始、原稿依頼・写真収集 印刷会社との打ち合わせ 校内発表会取材依頼（電話・FAX） 取材時の応対、礼状送付
12 月	発表後、チケット半券の確認 発表後、ポスター・チラシの回収と確認 アンケート集計・まとめ 招待客への礼状送付

⑤記録係（照明係兼務）

表 5　記録係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H27 年　1 月	ビデオ撮影・写真撮影計画 機材操作マスター 各係活動日の確認、活動中の撮影・記録
4 月	係活動・演技練習風景の撮影・記録
5 月	中間発表会の撮影・記録
8 月	合宿練習風景、集合写真の撮影・記録 記録の整理
11 月	校内発表会の撮影・記録 パンフレット用の写真撮影 記念 DVD 作成について舞台会社と打ち合わせ 発表会当日の写真を依頼する写真会社、保育科 1 年生（記録係）との打ち合わせ
12 月	発表会当日の写真撮影進行指示 記念写真の発注 記念 DVD の制作 記録保存
H28 年 3 月	記念 DVD 完成・発注・管理

⑥脚本係（演出兼務）

表 6　脚本係の活動内容（1 名）

年　月	活動内容
H26 年 7 月	「魔法書セフィロト」0 版作成
H27 年 1 月	「魔法書セフィロト」1 版発行
4 月	場面転換・大道具の把握
8 月	「魔法書セフィロト」2 版発行
9 月	「魔法書セフィロト」3 版発行
11 月	「魔法書セフィロト」4 版発行
12 月	「魔法書セフィロト」最終版発行
H28 年 1 月	発表会当日の舞台での台詞を最終脚本として打ち直す 題字・楽譜などを揃え、脚本製本
3 月	脚本完成・配布

表 7　作詞№一覧

№	曲名	№	曲名
1	魔法書セフィロト	9	博士の実験
2	森に住む兄妹	10	守り人のうた
3	友達になろう	11	偉大なる発明
4	不思議？怪しい？魔法書	12	歩き出そう
5	グリンダの考え	13	あなただけのもの
6	マーシャのうた	14	魔法使いたちの言葉
7	機械仕掛けの町	15	心をひとつに（劇中 version）
8	ゆかいな助手たち	16	心をひとつに

⑦音楽・音響係

表 8　音響係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H27 年　1 月	ミュージカル音楽の研究 シンセサイザー操作の研究
2 月	作曲活動
4 月	曲おろし・歌おろし 曲修正・伴奏付け
11 月	長野舞台との打ち合わせ・ピンマイクの確認 曲をシンセサイザーから CD におとす
12 月	本番用 CD 作り 音響操作の最終確認
H28 年　3 月	CD 完成・配布

表 9　作曲№一覧

№	曲名	№	曲名	№	曲名
1	開演 BGM	14	博士の実験	26	歩き出そう
2	安らぎの森 BGM	15	研究室 BGM	27	あなただけのもの
3	魔法書セフィロト	16	ゆかいな助手登場 BGM	28	魔法使いたちの言葉
4	魔法書セフィロト 効果音①～④	17	たくらみ BGM	29	囁き BGM
5	森に住む兄妹	18	魔法使いたち BGM	30	博士の登場 BGM
6	友達になろう	19	グリンダ魔法効果音	31	博士に反撃
7	不思議？怪しい？ 魔法書	20	守り人のうた	32	心をひとつに BGM
8	グリンダの考え	21	解放魔法効果音	33	レバー効果音①～②
9	機械仕掛けの町 BGM	22	偉大なる発明	34	心をひとつに（劇中 version）
10	マーシャのうた	23	装置起動効果音	35	最後の戦い BGM ①～②
11	機械仕掛けの町	24	メイン装置起動効果音	36	心をひとつに
12	町のサイレン効果音	25	守り人 BGM	37	エンディング
13	ゆかいな助手たち				

⑧演技・ダンス係（基礎技術係兼務）

表 10　演技・ダンス係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H27 年 1 月	ダンスの研究
3 月	音響係が作った曲に振り付けを考える
4 月	ダンスおろし・ダンス指導
5 月	中間発表後、ダンス修正
6 月	合宿ダンス練習計画
10 月	脚本メイン場面のダンス作り
11 月	衣装をつけてダンス練習
12 月	ダンス立ち位置最終確認

表 11　ダンス振り付け№一覧

№	ダンス名	№	ダンス名
1	魔法書セフィロト	10	守り人のうた
2	森に住む兄妹	11	偉大なる発明
3	友達になろう	12	あなただけのもの
4	不思議？怪しい？魔法書	13	魔法使いたちの言葉
5	グリンダの考え	14	博士に反撃
6	マーシャのうた	15	心をひとつに（劇中 version）
7	機械仕掛けの町	16	最後の戦い BGM①～②
8	ゆかいな助手たち	17	心をひとつに
9	博士の実験	18	エンディング

⑨基礎技術係（ダンス係兼務）

表 12　基礎技術係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H27 年 1 月	動ける身体・踊れる身体・歌える身体づくりの研究 トレーニング、ストレッチ内容検討・発信
7 月	夏季休暇練習計画・実施
10 月	朝練習計画・実施
12 月	発表当日本番前ウオームアップ進行

⑩大道具係

表 13　大道具係の活動内容（5 名）

年　月	活動内容
H27 年 3 月	ミュージカル大道具研究 大道具原案考案 「機械仕掛けの町」布パネル下書き ペンキ発注 長野舞台との打ち合わせ
4 月	「機械仕掛けの町」布パネルペンキ塗り
8 月	↓　「研究室」ベニア板の購入・デザイン検討・制作開始
10 月	「森」板パネル制作開始　↓ 舞台会社との連絡 舞台装置につける人形づくり
11 月	「レバー」制作開始 道具完成
12 月	発表前日の荷造り・トラック積み込み作業 舞台装置の位置決め・最終チェック
H28 年 1 月	解体作業・作業場の整理

⑪小道具係

表 14　小道具係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H27 年 1 月	ミュージカル小道具研究
3 月	小道具の原案考察・試作品制作
8 月	合宿後、小道具の見直し・修正
10 月	「ブローチ」デザイン考案・作成 完成した小道具を練習で使用・修正・補修
11 月	「魔法使いの杖」作り直し 小道具が舞台にあっているか、最終確認
12 月	発表前日の最終チェック・補修
H28 年 1 月	解体作業・片付け

⑫照明係（記録係兼務）

表 15　照明係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H27 年 3 月	ミュージカル照明の研究 脚本の把握
9 月	長野舞台との打ち合わせ
10 月	照明イメージ画制作
11 月	照明の確認（係・舞台会社） 影絵用アルミ制作
12 月	リハーサルでの照明確認・打ち合わせ・最終調整

⑬衣装・メイク

表 16　衣装・メイク係の活動内容（2 名）

年　月	活動内容
H27 年 1 月	ミュージカル衣装・メイクの研究 脚本配布後、衣装デザインの考案
2 月	ミシン・布調達
3 月	衣装デザイン決定後、採寸・型紙作成開始
5 月	布・型紙のセットを配布 衣装作成の相談に応じる
8 月	合宿までに衣装完成の目標を立てる 髪型・メイク考案
9 月	ダンスシューズのカバーの付け方説明
10 月	衣装修正 髪型・メイク試し、決定 ↓
12 月	発表前日　メイク道具の確認・裁縫道具・衣装道具の確認 発表前　最終確認
H28 年 1 月	衣装の片付け メイク道具・裁縫道具の片付け・整理

６　ミュージカル配役・パートについて

卒業共同研究として取り組む内容であるため、保育科 2 年全員が係に配属し、また全員が役者になり舞台に上がるよう計画されている。ここでは、配役（表 17）とパート（表 18）について記す。配役は、クラス全員による投票によって決めている。

表 17　「魔法書セフィロト」役名一覧

№.	役名	№.	役名
1	兄　アラン	13	守り人①（とと）
2	妹　ハンナ	14	守り人②（れれ）
3	魔法使い　グリンダ	15	守り人③（みみ）
4	魔法使い　ソフィア	16	守り人④（ふぁー）
5	魔法使い　ノエル	17	守り人⑤（そら）
6	博士　ウオルター	18	守り人⑥（らん）
7	助手　カルバン	19	守り人⑦（しー）
8	助手　トッド	20	守り人⑧（とあ）
9	機械仕掛けの町子どもマーシャ	21	子ども A（№21 二役）
10	機械仕掛けの町子どもニール	22	子ども B（№19 二役）
11	機械仕掛けの町子どもオリバー	23	子ども C（№20 二役）
12	機械仕掛けの町子どもリンダ	24	子ども D（№18 二役）

表 18　パート名一覧

パート名	役名
兄妹	兄１名・妹１名
魔法使い	魔法使い３名
博士・助手	博士１名・助手２名
機械仕掛けの町子ども	機械仕掛けの町子ども４名
守り人	守り人８名・子ども４名（二役）

７　創作ミュージカル「魔法書セフィロト」場面とあらすじ

ここでは、創作ミュージカル「魔法書セフィロト」のあらすじを、場面をおって紹介する。

第１場面　＜森＞

人と関わることが苦手で嫌いな兄・アランと明るく元気な妹・ハンナ。アランは過去に親友を亡くしてから、他者に心を開くどころか関わりさえも拒絶し、ハンナが側にいるだけで十分だと周りに話していた。ハンナはアランといつも一緒にいて、そんな兄のことを心配し、何とかしたいと思っていた。

二人がいつものように森で遊んでいると、見知らぬ子ども達が声をかけてきた。ハンナは兄以外の人と話すことも久しぶりで、その上遊びに誘われたのでとても喜んだ。ハンナが仲間に入ろうとしたその時、アランは大声を上げて怒った。「友だちなんか簡単に裏切るし、僕たちに必要ないんだ！ハンナと二人でいればそれでいい！」ハンナは友だちと一緒に遊べることに対して心浮かれたが、アランがいつものように他者と関わりを持ちたくないと言いだし、落ち込んだ。気分を悪くした子ども達は、二人を残し森から出て行ってしまった。その時、ハンナが一冊の本が落ちていることに気付いた。手に取ってみると古い本だった。まるで魔法書みたいだというアランの言葉に、ハンナは本に興味を持ち開いてみることに…。するとそこには見たことのない文字が書かれ、不思議で奇妙な感じさえした。手書きになっている一文を見つけた二人が、声をそろえて読んでみた。「ルーチェ・チェルカ・トーレ！」突然強い光が放たれ、二人は森から別の場所へ移されてしまった。

第 2 場面＜魔法使いの世界＞

兄妹が見つけた本は、魔法使い・グリンダの『魔法書セフィロト』だった。この魔法書は、薬草の育て方からドラゴンの倒し方など様々な事柄が載っている。この本を持っていれば、知りたいことはもちろんどんなことも分かり出来てしまう。

グリンダは魔法界の重鎮。そしてその傍らには、一人前の魔法使いになるために魔法学校に通うソフィアとノエルがいた。二人は、グリンダの魔法書があればどんなことも出来ると知り、自分のために使おうと企んだ。しかし、グリンダから、魔法は人のために使うものだと叱られてしまう。

兄妹のことを心配していたグリンダは、二人の手元に魔法書を置き、その魔法書の力によって二人を変えようと考えたのだった。そして、ソフィアとノエルにもその様子を見て、魔法界のことや人間のことを理解させようとした。ソフィアとノエルは魔法書にどんな力があるのかと、これから起こることに期待を持った。

第 3 場面＜機械仕掛けの町＞

強い光と共に兄妹は、今まで来たことのない町に立っていた。辺りを見回すと、人が住んでいる街並みはなく、どこに来てしまったのかと不安に襲われた。そんな二人に少女が近づいてきた。声をかけられた兄妹は少女の顔を見て驚いた。兄妹が親友に見間違えてしまう程、親友に顔が似ていたのだ。思わず声をかけた兄・アラン。妹・ハンナもあまりに親友によく似ていたので、驚いてアランに近付くと、アランは、親友のはずがないと、少女に冷たくあたった。親友はすでに亡くなっていて、この世に存在するはずがなかったからだ。

少女は、そんな兄妹の様子を見て過去に辛い経験があったのではないかと察しながら、自己紹介を始めた。少女の名前はマーシャ。マーシャは兄妹の辛い気持ちを察した時、自分も“気持ち”を持っていたはずだと話した。不思議に思ったハンナは、気持ちを持っていたとはどういうことなのかと聞くと、マーシャはこの町について説明をしてくれた。この町にいる博士が、人間の持っている気持ちを煩わしいと嫌い、そんなものは必要ないと、気持ちを奪うためのブローチを作った。それを町の住人につけ、博士が住人の気持ちをコントロールしているのだという。この町では、楽しいことや悲しいことを感じる気持ちを持つことなどないという。それを聞いたハンナは「マーシャはロボットなの？」と尋ねた。マーシャは、ロボットという言葉を聞いてショックを受けたが、コントロールされているのであれば自分はロボットかもしれないと答えた。気持ちをコントロールされているはずのマーシャが、自分達のことを心配してくれたのは何故なのか不思議に思ったハンナが尋ねると、マーシャのつけているブローチは故障していることを知った。マーシャは、博士にそれを知られないよう、コントロールされている振りをしていることも兄妹は知ってしまう。

そこへ、町の住人である子ども達がやってきた。マーシャは、コントロールされている振りをしていることは内緒にしていてほしいと兄妹に頼んだ。子ども達は、見慣れない兄妹であることは分かったが、気にすることもなかった。そして、この町が便利なもので溢れ、面倒なこともなく暮らせるのは、博士のお陰なのだと兄妹に話した。アランは、そんな話を聞いても決して羨ましいと思わなかった。むしろ、「ここの住人は笑うことも怒ることもなく、人形のようだ」と気味が悪くなった。アランがハンナと一緒に早くこの町を出ようとすると、町中にサイレンが鳴り響き、兄妹は驚いた。一方、子ども達はサイレンの音が聞こえるとすぐに一列に並び始めた。マーシャに、博士と助手が来ても今はじっとしているように言われ、兄妹は子ども達と同じ動きをして見付からないようにした。そこへ、博士の助手である二人が子ども達の見回りにやってきた。異変に気付かない助手が見回りを終了しようとしたその時、兄妹にブローチがついていないことに気付いてしまった。ブローチはどうしたのか、何故ここにいるのかと兄妹を捕らえようとする助手。兄妹を守ろうとするマーシャ。捕まらないよう逃げようとする兄妹。その騒ぎを聞きつけて博士がやってきた。面倒なもめ事が嫌いな博士は、実験の邪魔になると怒り、兄妹を拘束するよう命じた。

第 4 場面＜実験室＞

博士に見付かり、助手に捕らえられた兄妹は、博士の実験中である“感情を奪う装置”に縛り付けられた。博士は、兄妹を新しい実験に使おうとしたのだ。

そこに、魔法書セフィロトに存在している守り人が魔法書から飛び出てきた。守り人は魔法書セフィロトが効果を発揮する時に現れる。早速、装置に縛り付けられた兄妹を助け出そうとした。すると、誰かの足音が聞こえ、守り人は姿を隠してしまった。現れたのはマーシャだった。マーシャは二人を装置から放とうとしたが、力ではどうにもならない。それを見ていたのは魔法使い。兄妹の力になりたいと思った。グリンダは人のために心を動かした魔法使いに魔法を教えた。すると、兄妹は装置から放たれた。そして、「困った時に読むといいだろう」と魔法書セフィロトの中のある一節を兄妹に教え、その場からいなくなった。

急がないと博士が実験室に戻って来てしまうため、マーシャは兄妹にここから逃げるように言った。兄妹はマーシャも一緒に逃げようと言ったが、マーシャは博士から兄妹を守るため二人を先に逃がし、自分は実験室の装置裏に隠れることにした。

実験室に戻った博士と助手は、装置に縛り付けておいたはずの兄妹がいないことに気付き、実験室は大騒ぎになった。助手が兄妹を探していると、物陰に隠れていたマーシャを見付けた。マーシャが兄妹を逃がしたことを怒った博士は、今度はマーシャを装置に縛り付けた。マーシャが兄妹に対して感情を持ったことに腹を立てたのだ。

博士と助手が実験室から出ていった後、兄妹はマーシャを助けるため実験室に忍び込んだ。アランは「博士に見付かったら大変なことになる」と嫌々ハンナについてきた。装置に縛り付けられたマーシャは、目も開けずにじっとしている。兄妹は感情を奪う博士は本当に恐ろしいと感じた。その時、ハンナは困った時に読むといいと言われた魔法書セフィロトの一説を思い出した。アランはそんな力を信用するはずもなく、魔法書セフィロトを開こうとするハンナを止めた。ハンナはアランから抵抗を受けながらも、魔法書セフィロトを開きその一説を読み上げた。「ルーモス・レベリオ！」すると、魔法書に存在している守り人が現れた。驚いた兄妹に、守り人は優しく話しかけた。「マーシャに声をかけてみたらどう？」とアランの背中を押すが、アランは、自分には関係がないと背中を向けた。守り人は、マーシャは自分がどうなろうとも助けてくれたことを話し、もう一度、アランの背中を押した。アランは、装置に縛り付けられ目を閉じたままのマーシャに話しかけた。「どうして僕たちを守ってくれたんだ？」マーシャは微笑むだけで何も話さない。アランはそんなマーシャに過去にあった辛いことを話し始めた。それは、マーシャに顔が似ている親友のことだった。アランが自分のことを話し始めた時、守り人はアランとマーシャだけで解決できると思い、魔法書に戻っていった。

親友が突然いなくなり辛い思いをしたことを知ったマーシャは、アランには辛さを乗り越え、前に進んでほしいと力の限り訴えた。

第 5 場面＜機械仕掛けの町＞

兄妹はマーシャを助け出す方法はないか考えていた。その様子を見た町の子ども達は、この町で面倒なことを起こして巻き込むのはやめてほしいと冷たく言った。兄妹だけでは解決策が見当たらず、その上子ども達に冷たくされ、マーシャを助け出すなんて無理なことだと感じ始めていた。肩を落とす兄妹に、魔法使いの声が聞こえてきた。「あなたはひとりではない。あの本を開いてごらんなさい。」

魔法使いの言葉に導かれるように、兄妹は魔法書セフィロトをもう一度開いた。守り人が現れ、マーシャを助ける方法を教えてくれた。実験室にあるレバーを引くことができれば装置の電源が落ち、マーシャの感情を奪われることもないと言う。助け出す方法を知った兄妹は、マーシャの所へ急いだ。

第 6 場面＜実験室＞

装置の電源につながっているレバーを探そうと、再び実験室に来た兄妹。マーシャの側に駆けつけると、マーシャがぐったりした。博士がブローチの電流を強くしていたのだ。このままではマーシャの感情を全て奪われてしまうと、兄妹はマーシャに声をかけ続けた。

その騒ぎを聞いて、博士と助手が実験室に入ってきた。しかし兄妹は、博士に捕まることを恐れなかった。博士と助手は、「大人に逆らうんじゃない！」と、研究者の頭脳と科学の力で兄妹を捕らえようとした。博士の持つ頭脳や科学の力には敵うことはできない兄妹は、自分達はマーシャを助け出すという熱い思いで博士に立ち向かった。でも、やはり博士の頭脳と科学の力には敵わず、兄妹は倒れこんでしまった。博士は、「自分に逆らう兄妹をもう許すことはできない」と、ブローチをつける準備を始めた。

倒れこんだ兄妹のもとに守り人が駆け付けた。兄妹は目を覚まし、再びレバーを探した。たくさんの装置がある実験室の中に置かれたレバーを見付けた。そのレバーは自分の体よりもはるかに大きく、これを引くなんて無理だとアランは思った。しかしハンナは、「マーシャを助けるんだ」と、大きなレバーにひとりで飛びついた。ハンナひとりの力では動くはずがない。それでもハンナは何度もレバーを力いっぱい引いた。ひとりで頑張るハンナを見て、守り人も力を貸す。ハンナは守り人が力を貸してくれたことを喜んだ。そんなみんなの頑張りに心動かされたアランは決意した。「僕、もう逃げない」と。そして、アラン、ハンナ、守り人みんなで大きなレバーを引いた。みんなの力が合った時、レバーが動き、マーシャのつながる装置の電源が切れた。同時に、子ども達のブローチの電源も切れ、感情が元に戻ったのだ。今まで感情をコントロールされていた子ども達に笑顔が戻った。兄妹は、みんなで力を合わせれば困難なことにも立ち向かう勇気が湧いてくることを実感した。

博士によって感情をコントロールされていたマーシャも子ども達も、今までのように暮らせると喜んだが、博士に知られ、もう一度感情を奪われそうになった。もう二度と感情のない人間になんてなりたくないと、子ども達も兄妹と力を合わせ、博士に立ち向かった。感情を持つことは面倒なこと、そして、心を合わせることなんて最も嫌いな博士は、ひとつになろうとする兄妹、子ども達をみて、どんどん気分が悪くなった。次第に兄妹、子ども達の感情が膨らみ、博士と助手は降参した。

兄妹が他者と心を合わせ、喜びを分かち合えた時、機械仕掛けの町に住む子ども達、そしてマーシャと別れる時がやってきた。優しいマーシャともっと一緒にいたいと泣くハンナ。マーシャも同じ気持ちだったが、お互いがいるべき場所で幸せに暮らそうと兄妹に別れを告げた。アランは、マーシャと出会い、人のために何かをする時は勇気がいること、その勇気を持つことができたことがアランの自信に変わり、これからも勇気を持って前に進むことを約束した。

８　創作ミュージカル公演後のアンケート実施と結果

当日の発表には、一般の方が 403 人来場し、創作ミュージカルを観覧した。

学生が作成し当日受付で渡したパンフレットにアンケート用紙を挟み、感想等を記入してもらった。公演終了後にそのアンケート用紙を会場出口で回収し、後日、アンケート結果をまとめた。

配布したアンケート用紙は資料 1 の通りである。以下にアンケートの集計結果を記す。

質問 2 に関しては、集計にミスがあったため記載していない。

アンケート結果

アンケート回答者数：200 名

1　本日の創作ミュージカル「魔法書セフィロト」をご覧になった感想はいかがでしたか

①大変楽しかった　141　②楽しかった　51　③まあまあ楽しかった　8

④楽しくなかった　0

2　本日の創作ミュージカル「魔法書セフィロト」は何でお知りになりましたか

①幼稚園・保育園・学校　②学生・職員から　③知人・友人から

④マスコミ（長野市民新聞・週刊長野・信濃毎日新聞）

⑤ちらし・ポスターで　⑥昨年またはそれ以前の創作ミュージカルを見て

3　本日の創作ミュージカル「魔法書セフィロト」の中でよかったと思うところはどこですか

①演出　106 ②脚本　86　③作曲　90　④歌唱　124　⑤ダンス　141

⑥演技　99　⑦音響　69　⑧照明　69　⑨衣装　74　⑩メイク　38

⑪舞台装置　48　⑫小道具　48

＜多数の意見を抜粋＞

○　演出・脚本に関する意見

・人として忘れてはならない大切なものを取り上げていてよかった

・ストーリーの展開が気になり、楽しかった

○　作詞・作曲・音響に関する意見

・ラップがよかった、おもしろかった

・心に残る歌だった

・最後の歌がよかった

○　歌唱に関する意見
・歌声がきれいだった
・役になりきって歌っていてよかった

○　ダンスに関する意見
・揃ったダンスがきれいだった
・戦いをダンスで表現するところがよかった
・ダンスが役にあっていた

○照明に関する意見
・照明が効果的だった
・開演前の幕に映った照明がきれいだった

○　メイク・衣装に関する意見
・色彩豊かな衣装、靴がよかった
・手作りの衣装が凝っていてよかった

○舞台装置に関する意見
・手の込んだ舞台装置がよかった

○　小道具に関する意見
・丁寧に作られていた

など

4　改善したほうがよいと思うところはどこですか
①演出　11　②脚本　9　③作曲　12　④歌唱　10　⑤ダンス　18　⑥演技　21
⑦音響　6　⑧照明　6　⑨衣装　8　⑩メイク　8 ⑪舞台装置　10
⑫小道具　5

○　多数の意見を抜粋
・声の聞き取りにくい人がいた
・歌詞をはっきりと歌ったほうがよい
・自信をもってダンスするとよい

５　印象に残っている点、その他感想などございましたらご記入ください

○　意見を抜粋

・中ホールが満席になるよう、いろいろな方法で宣伝した方がよい

・学生の一生懸命な姿と優しさが伝わってきた

・保育科らしく、子ども達に分かりやすい内容だった

・ひとつのものを作り上げることの大変さを感じた、感動した

など

９　発表までのエピソード

卒業共同研究創作ミュージカルの活動は、脚本作りのためのアイディアを出すところから始まる。例年のように脚本のアイディアの募集をかけたところ、今年度は１名の学生が手を挙げた。以下、この学生をＡと呼ぶこととする。Ａは、保育者になるために人前で歌ったり、踊ったりすることを身につけたいと本校の「ミュージカルクラブ」に友だちと入部してきた。美術が得意な彼女は、自分の得意分野を生かしながら、表現力も高める努力をしていた。しかし彼女は、人とコミュニケーションをとることが苦手で、にこやかに話をしたりすることが少ないため、真面目で近寄りにくいと思われることもしばしばあった。

脚本のアイディアは、1年生の夏休みを利用して脚本に仕上げられていく。Ａのアイディアがより膨らむよう、指導者は彼女のアイディアに加わりながら話の流れをまとめられるようにした。その時のＡは、指導者と話しながらその世界の中に入り、とても生き生きとしていた。夏休みを利用して完成させた脚本を、夏休み明けクラスの仲間に発表した。Ａの考えた脚本を見たクラスの仲間は、「こんなことができるなんてすごい」と思ったのだろう、素直に自分達の創作ミュージカルの脚本として受け入れ、Ａも充実感を持っていた。

秋になり、係決めを行う際には、Ａと一緒にミュージカルクラブに入部してきた表現力豊かな学生を演出係に推薦する仲間が多数いた。多数の推薦があったことを受け、指導者がこの学生に演出係の依頼をしたが、断られた。理由は「高校時代からいつも重要な役を任せられてきた。今まで断る勇気もなく引き受けてきたが、嫌な思いをすることが多かった」と涙を流しながら話し始めた。嫌なことや面倒なことに対して前向きに取り組み、困難なことを乗り越える力を、この創作ミュージカルの活動を通して身につけてほしいと願い指導してきたが、心悩ますこの学生を見て、演出係のような目立った係でなくともこの学生の良さを生かし、また成長できる場面を作ろうと指導方法を変えてみることにした。そこで、推薦時に次点だった学生を新たな演出係にすることにした。それが、脚本を担当したＡだった。Ａにも同じように演出係の依頼をすると、驚いた表情を見せたものの笑顔で引き受けてくれた。クラスメイトとあまり関わりを持たない彼女だったため、仲間とうまくコミュニケーションをとって進めていけるだろうかと心配したが、脚本作りで最後まで努力したことや意欲があればきっと乗り越えられると思い、Ａを演出係にした。

係も決まり、先輩から引き継ぎを終えた頃、卒業共同研究として創作ミュージカルを行うことに対して疑問の声が上がり、創作ミュージカルでない方法もあるのではないかとクラス全体で話し合いが開かれた。話し合いでは、各々が思っていることを話し始めた。「創作ミュージカルの活動時間を、保育者にとって必要なピアノの練習や教材研究の時間にあてた方がいい」というミュージカルに対して否定的な意見があがった。反対に、「高校の頃から本校のミュージカルを見ていつか自分もあの舞台に立てると夢を見てきた」「全て手作りで大変だと思うが、やってみたい」というミュージカルに対して肯定的な意見もあがった。

指導者を外した話し合いの場を設けた学生は「創作ミュージカルをやります」と答えを出した。賛成の意見と反対の意見が約半数の中、若干賛成意見が多く、今年度も創作ミュージカルをやるという決断をしてきた。面倒なことや自分の利益にならないと思うことには極力関わらない姿勢を見せることの多い学生が、創作ミュージカルをやるという決断をしてきたことに指導者は驚いた。何度も話し合いを重ねた学生は、やると決めたからにはいいミュージカルにしよう、気持ちをひとつにしようと、活動の遅れを取り戻すため、各係の係長を中心に活動が進んでいった。

大道具係は例年、約縦 7m×横 16mの布に背景を描く布パネルの制作に取り掛かる。布パネルは大きな布を縫い合わせる作業から始まるが、今年度は活動費用が昨年より削減され、先輩と同じようには活動費が使えず、どこで費用を抑えていくかを考える必要があった。活動費が削減されたからといって、簡単に道具や衣装等の舞台に必要な物を減らすことがいいことではなく、ホクト文化ホール中ホールで発表すること、また、自分達の作る舞台に理想を持って取り組むことが必要だと考えた上で、大道具の具体的な内容を決定していった。今年度の大道具も舞台に映える布パネルを使いたいと理想が膨らみ、その実現のために試行錯誤する期間が続いた。たどり着いた結論が、先輩が作成した布パネルを再利用することだった。大きな布を縫い合わせる手間はないものの、ペンキで描かれている布に上描きをしていく作業は、想像よりも時間がかかった。布パネルに描く下絵を縮図にし、それが表現できるようペンキも多くの色を用意する必要がある。色とりどりのペンキを購入すれば簡単だが、限られた予算の中で布パネル、板パネル、立体を制作するため、布パネルだけに費用を使うわけにはいかない。そこで学生は、欲しいペンキの色を揃えるために教材研究を始めた。ペンキの色を混ぜ、色とりどりのペンキの用意ができ、布パネルに色を付けていった。

限られた予算の中での活動では、初めから「予算がないから出来ない」と諦め、工夫する、試してみるといったことを避ける学生が多い中、大道具の係は教材研究から取り掛かった。教材研究には時間もかかる。しかし、この教材研究は保育現場において、時間をかけて、幼稚園教諭、保育士が行い、子どものより良い成長のため、また楽しく充実した園生活を送るために必要不可欠である。

最後まで諦めずに取り組み出来上がった大道具は、本番のステージ上でしか広げること

が出来ないため、その日を心待ちにしていた。いよいよ本番当日。舞台の仕込みは、午後の公演に間に合わせるため早朝より行った。まず 2 年生は、リハーサルと公演に間に合わせるためメイクや衣装を整えるが、大道具係の 5 名と演出係は自分のメイクや衣装に取り掛からず、舞台の仕込みをしている舞台上にいた。心配そうに見つめる中、布パネルがバトンに吊られ広がると、大道具係の 5 名と演出係は手を取り合って喜び、舞台手伝いの 1 年生は大きな布が一つの絵になっていることに驚き感動していた。

今まで様々なことを考えて取り組み、完成したものが、ホクト文化ホール中ホールに広がるこの瞬間は、学生に大きな充実感や達成感を与える。その感覚が、学生の生きる力となり、保育現場で必要な力につながると信じている。

前に述べた演出係になったＡも、公演前に大道具係と大きな充実感を味わい、公演では大勢のお客さんの前で堂々と演技することができた。人前で話すことも苦手であった彼女が、役になりきり歌ったり、踊ったりしながらミュージカルを心から楽しんでいることが伝わってきた。自分が苦手だったことに挑戦し、悩み苦しんだ時、多くの仲間に支えられ乗り越えてきたことが、ステージ上での“楽しみ”につながっているのだと思った。

彼女だけでなく、一人ひとりの学生がホクト文化ホール中ホールという大きな舞台での発表を迎えるために取り組んできたこと、また心を動かしてきたことを通して、周りの方々に感謝することを学んだ。このことは、人との関わりを避けてきた学生にとって大きな学びであり、幼児教育・保育の現場で生かされると思う。20 名という人数で舞台に立った喜びを心の支えにし、これからも強く、優しく歩んでいってほしい。

10　創作ミュージカルを終えて

卒業共同研究の活動は、幼稚園教諭・保育士を目指す学生が教育・保育現場で必要な力を身につけることを目的としている。創作ミュージカルは、保育科の学生にとって必要な経験になると考え、20 年来、保育科卒業共同研究として行ってきた。答えのない問題に直面し取り組む創作ミュージカル活動の過程では、答えが見つからず悩み苦しむことも多い。しかし、それを乗り越えるために自分の力を信じ努力し続けることや、仲間や周りの存在に気付き互いに支え合うこと、また先を見通した計画を立て実行していくことなどを経験することが出来る。このことが、教育・保育現場で必要な力につながると信じ、指導者は学生指導を行ってきた。この卒業共同研究創作ミュージカルの活動は、学生主体の活動でなければ保育者になるための教育として意味を成さないため、今年度の学生が創作ミュージカルをやらないと決断してきた場合、これに代わるものとしてどんな指導が必要になるだろうかと筆者は頭を悩ませた。学生時代に努力や失敗経験、また成功経験をせず、子ども達の心を育てる保育者になれるのだろうか…。

しかし、「創作ミュージカルをやります」と学生が答えを出した。賛成の意見と反対の意見が約半数の中、若干賛成意見が多く、今年度も創作ミュージカルをやるという決断をしてきた。

その話し合いの時、責任者の学生はクラスの仲間に「軽い気持ちで責任者を引き受けたわけではない」と涙を流しながら話したという。責任者は、高校時代からクラスのまとめ役で先頭に立つことが多く、クラスの仲間からは「何でも出来る」と思われ、また、自分の感情をあまり表に出さず、物事を淡々とこなすイメージがあった。そんな彼女が涙を流しながら話したことに、クラスの仲間は驚いたのだろう。彼女が感情を出し「創作ミュージカルをやろう」と訴える姿に心を動かしたクラスの仲間は多かったのだと思う。なぜ責任者は創作ミュージカルをやろうと訴えたのか。それは責任者として選出された時、引き受けようかどうかを悩んだからだ。このクラスをまとめていく自信がない、また友だちとの関係は、深くなりすぎずトラブルにならにようにしたいと考えていた。しかし責任者は指導者と話していくうちに、創作ミュージカルを通した仲間の成長を次第に楽しみにするようになり、不安だけれど責任者を引き受けると言った。彼女が責任者を引き受けた時に覚悟が生まれた。その時に創作ミュージカルをやめようという意見が出てきたことに、責任者は心から訴えたいことがあったのだろう。

1 年生の時点で、創作ミュージカルをやりたいと思う学生より、面倒なことはできれば避けたいと思っている学生が多いことは問題とは思わない。プライベートの時間をも削ることがあったり、誰もが初めから演技が好きでやりたいと思うはずもないからだ。しかし、避けたいと思うことに取り組む中で、失敗・成功体験を繰り返しながら得るものこそ、保育現場に出ていく学生にとって必要な経験であると信じ、長い間、保育科の卒業共同研究として創作ミュージカルの活動を行ってきた。

ホクト文化ホール中ホールで発表することが、学生の創作意欲を高め努力につながる。努力することこそ、またその中で困難を乗り越えることこそが、学生の経験になり必要な力が育つ。指導者もまた、学生との様々な経験を通して教えられることが数多くあり、学生指導へつなげていくことができる。そんな卒業共同研究の活動が、学生の必要な経験になることはもちろん、文化学園長野専門学校の創作ミュージカルとして認知されてきた歴史の重みを感じるものとなったことを誇りに思う。今後の活動も学生にとって有意義なものになることを願っている。

資料１

創作ミュージカル「魔法書セフィロト」アンケート

本日は、創作ミュージカル「魔法書セフィロト」にご来場いただき、誠にありがとうございました。

文化学園長野専門学校の保育科では、皆様からのご意見をお伺いし、来年度以降もより良い共同研究を目指して励んでまいりたいと思っております。

つきましては、以下のアンケートにご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

１　本日のミュージカル「魔法書セフィロト」をご覧になった感想はいかがですか。

①大変楽しかった　②楽しかった　③まあまあ楽しかった
④楽しくなかった　⑤その他（　　）

２　本日のミュージカル「魔法書セフィロト」は何でお知りになりましたか。

①幼稚園・保育園・学校　②学生・職員から　③知人・友人から
④マスコミ（長野市民新聞・週刊長野・信濃毎日新聞）
⑤ちらし・ポスターで　⑥昨年またはそれ以前の創作ミュージカルを見て
⑦その他（　　）

３　本日の創作ミュージカル「魔法書セフィロト」の中でよかったところはどこですか。

[複数回答可]

①演出　②脚本　③作曲　④歌唱　⑤ダンス　⑥演技
⑦音響　⑧照明　⑨衣装　⑩メイク　⑪舞台装置　⑫小道具
⑬その他（　　）
★よろしければ、具体的な内容をご記入ください。

４　また、改善したほうが良いと思うところはどこですか。[複数回答可]

①演出　②脚本　③作曲　④歌唱　⑤ダンス　⑥演技
⑦音響　⑧照明　⑨衣装　⑩メイク　⑪舞台装置　⑫小道具
⑬その他（　　）

5　印象に残っている点、その他の感想などございましたらご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

当アンケートは、ロビーにございます回収箱にお入れくださいますよう、お願い申し上げます。

また、下の住所に送っていただけたら幸いです。

〒380-0915　　長野市上千田 141

文化学園長野専門学校　保育科　卒業共同研究係

文化学園長野専門学校　研究紀要投稿既定

１．　目的

文化学園長野専門学校研究紀要は、本校における研究・教育活動の成果を広く公表することを目的として発行する。

２．　投稿資格

紀要に投稿できる者は、次のとおりとする。

（1）　本校専任教員および兼任教員

（2）　本校専任教員との共同研究者（この場合は本校専任教員と連名とする）

（3）　編集委員会が執筆を依頼した者、あるいは執筆を認めた者

３．　投稿原稿の種類

原則として、次のとおりとし、未公刊のものに限る。

原著論文、総説論文、研究ノート、報告（実践報告・調査報告）、書評、資料紹介など。

上記の他、紀要編集委員会が適当と認めたもの。

４．　提出原稿

原稿の作成は、別に定める「紀要原稿作成要領」に従って執筆する。

５．　原稿の提出先

本校紀要編集委員会

６．　採択

原稿の採択と調整は、紀要編集委員会で行う。

７．　著作権

掲載された論文などの著作権は、原則として文化学園長野専門学校に帰属する。ただし、著者が自分の論文などを利用することは差し支えない。

編集委員会

守　秀子（委員長）

杉村　僚子

平成 27 年　12 月 22 日発行

文化学園長野専門学校
研究紀要　第 7 号

編集発行　文化学園長野専門学校
〒380-0915　長野市上千田 141
TEL. 026-227-2090
FAX. 026-224-2200

印刷　東方出版社
〒381-0038　長野市東和田 902-4
TEL. 026-244-4327

BULLETIN
OF
BUNKA GAKUEN NAGANO TECHNICAL COLLEGE

No.7

CONTENTS

A Survey of Music Education for Preschool Children:
Voice from Questionnaires Conducted in Kindergartens and Nursery Schools
---------- KURASHINA, Miharu

A Survey of the Usage of First-person Pronouns in Preschool Children
---------- MORI, Hideko

An Examination of Effectiveness of Visual Teaching Aids in Nursery Education Practices:
From a Viewpoint of Intrinsic Motivation
---------- MIYABARA, Chiaki

" The Three Bracelets "
An Original Musical Creation and Performance 2014
---------- ISHIZAKA, Yumiko
KURASHINA, Miharu

" The Book of Magic : Sephirot "
An Original Musical Creation and Performance 2015
---------- ISHIZAKA, Yumiko

2015